

極樂通
樂通



Vol. 2

UBUD

U・B・U・D ◆ I・N・D・A・H



photo: Y. Hori

バリで食べる鶏はうまい。ブロイラーとかで無理矢理育ったような軟弱な身体ではないからあたりまえといえばそれまでであるが、日本では最近こういった鶏に巡り合える機会は少ない。UBUDのパサールで見かけた竹編みの籠の中では、元気な鶏の集団が雑談をしていた。生きているわけだから活きがいい。こういった鶏たちには村を歩いていてもよく出会える。あちこちを親子ずれでひよこひよこことろろついて餌のミミズなどをついばんでいたりする。朝は暗いうちから騒々しく鳴き騒ぐ。道路は車やバイクよりも鶏の横断の方が優先である。闘鶏で活躍する種類の鶏はバリの男たちにとっては自分の子供のようにかわいい。自然の中で育つ鶏たちはたくましくて美しい。そして神様も悪霊も人間も、このバリの鶏はお気に入りである。

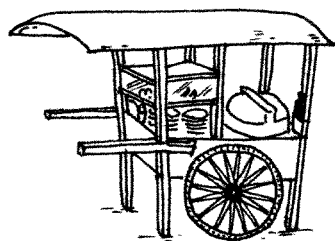
堀 祐一

鶏のうまい

Vol. 2 1994 April

Contents

● Profil 人物紹介	
A.A.Gede Raka Pudja -----	4
● Kabar Baru Berita Lama	
UBUD のギャルは今 -----	5
懐かしのセゴール -----	6
さすらいのギャンプラー -----	7
● Culture Shock	
BALI の犬 -----	8
● C・O・L・U・M・N	
カール君のある日 -----	10
サギ・詐欺・鷺 -----	12
● Belajar Tari&Gamelan	
棚からバリダンス -----	13
● Laporan Koresponden Khusus	
ニュピの過ごし方 -----	14
● Momotarou	
ももたろうバリ日記 -----	17
● UBUD よろず百科	
JALAN ² -----	18
● Enak・Enak・Ubud おいしいものに目がない	
大豆は哀れな優等生 -----	20
● Buku Buku	
タン・ナピ・ナピ -----	23
● Apa Itu? 噂話に耳がない	
Ke Mana? -----	24
● Dari Jepang	
私はウブドが好きである。が、しかし… -----	26
● 精密機器とバリの虫 -----	27
● 次号の予告 -----	27
● Tulisan Bersambung 連続エッセイ	
ragu-ragu lagu-lagu -----	28
● Gallery ギャラリー探索	
Bali Sakti -----	29
● Toko BEST 店	
Bulan Madu -----	30
● Warung 味な店	
Masakan Padang Dun SNAK -----	30
● Pondok Manis 私の常宿	
Puri Sekar Ayu -----	31
● Pesan & Kesan 旅人一声 -----	31
● その他のニュース -----	32
● ウブッな人々 -----	33
● Studio スタジオ -----	34
● Pengumuman 伝言板 -----	34



表紙からのメッセージ

ほとんど"無"の状態ですら自由にかかせてもらいました。

UBUD の空気・におい・そして村のみんなの笑顔を思い浮かべてたら 何も こだわることないでしょ(?)

星屋 知恵

編集室便り

○入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

- ・Macintosh フォーマットの FD (Text Data)
- ・MS-Dos フォーマットの FD (Text Data)
- ・Nifty-Serve の Mail

(宛先 ID/ MHC03203:菅原 or GCB01162:堀)

詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

○挿し絵募集

絵に自信のあるあなた。バリっぽいイラストをどしどし送ってください。

A.A.Gede Raka Pudja

A.A.Gede Raka Pudja は、UBUD の伝統画を描く画家の一人である。彼は子供の時より画家であり、その画風は父親より学んだ伝統画である。伝統画を愛し、それを財産としている。

彼は未だかつて、新しく開花してくる画風に影響された事はなくまさに、伝統画と一体になっているかのように感じる。

といえども、大家族の家長として、家計を支えてゆかねばならず、絵を売る事は、時折困難であった。収入を補う為に、彼は田にも出て働いた。

A.A.Gede Raka Pudja は、5人の子供に（伝統画を中心に）絵画を教える他に、「将来各自が独立して生きてゆくには、国の役に立つ仕事に就くべきで、それにはまずきちんとした教育を受けさせる事が必要だ」（大学へ進ませること）と考えた。

といえども現実には、5人の子供を大学まで進ませることは容易ではなく、暮らしは決して裕福とはいえなかった。しかし、彼はどんな時にも神への感謝を忘れることはなかった。〈息子 A より〉

小柄で身軽な Gung Aji（彼のことを尊敬の意味を込めて"おじさん"=Gung Aji と呼ぶ）は、30年間愛用している自転車に乗って毎日自宅の Padang Tegal から（自分の田と、Gallery がある）Pengosekan を行き来している。ペダルをこぐその後ろ姿は、ゆったりとしていて風格がある。農耕が好きで自ら田に出て働くことは今では彼にとって良い気分転換にもなっているようだ。



photo: Y. Hori

Padang Tegal の家を訪ねると、いつもキャンバスに向かう Gung Aji の姿がある。その絵は伝統がで、大作が多い。彼のテーマは、風景画、ブラックマジックの物語、BALI 人の生活風景で、やわらかい色づかいと、みごとな質感を描き出す、その緻密な作業には本当に言葉を失ってしまう。

一つの絵を時間をかけてじっくり描き上げる"妥協"を許さない職人気質は、万国共通のようだ。そんな彼の息子達への評価は厳しい。

現在、彼の絵の一部は、Pengosekan の Gallery に子供達の作品と共に展示されている。息子達の画風は（伝統がを経てきた上での）それぞれ個性が出てきており、なかなか興味深い。

Gung Aji もさることながら、息子達のこれからの活躍も期待したい。

1930年 UBUD 村 Padang Tegal の芸術家の家に6人兄弟の長男として生まれる。
 1935年 Walter Spies(ドイツ人)と Rudolf Bonnet(オランダ人)、Cokorde Gede Agung Sukawati の三人が、UBUD の彫刻家と画家を率いて [Pita Maha](UBUD の芸術家グループ) を結成する。
 1936年 父 (A.A.Gede Meregeg) より絵画を習い始める。Gianyar の日本人学校に入学する。(小学校7年間通う)
 1938年 A.A.Gede Raka Pudja[Pita Maha] に入籍。(当時8歳)
 1942年 第二次世界大戦始まる。日本経済は混乱をきたし、画家達は絵を描くことを中止しなければならなくなる。
 A.A.Gede Raka Pudja、シンガラジャの中学に入学。サッカークラブに在籍し、学生時代をシンガラジャで過ごす。
 1945年 日本軍撤退。
 1950年 Rudolf Bonnet をリーダーに UBUD の画家グループが再結成される。A.A.Gede Raka Pudja は、友人達と国内外

で展覧会を開くようになる。

1955年 Walter Spies と Rudolf Bonnet 帰国。

1956年 A.A.Gede Raka Pudja の描いた「BALI 舞踏の祭り」は Rudolf Bonnet によって修正され、スカルノ大統領のコレクションの一つに加えられた。

1961年 A.A.Gede Raka Pudja 結婚。5人の子供を育てる。

1966年 オーストラリアでの展覧会を行う。

1970年 A.A.Gede Raka Pudja がリーダーとなり (Padang Tegal 出身者を集めた) 「Karsamaha」を結成。

1981年 「Karsamaha」は「Patna Warta」と合併。この年より、毎年プリルキサン美術館で展覧会を行う。

1985年 日本/福岡にある美術館の展覧会に参加する。

1986年 日本/東京での展覧会に参加する。

1991年 「Tirta Kamandaly の物語」を描いた絵を Dalem Puri へ奉納。

UBUD のギャルは今

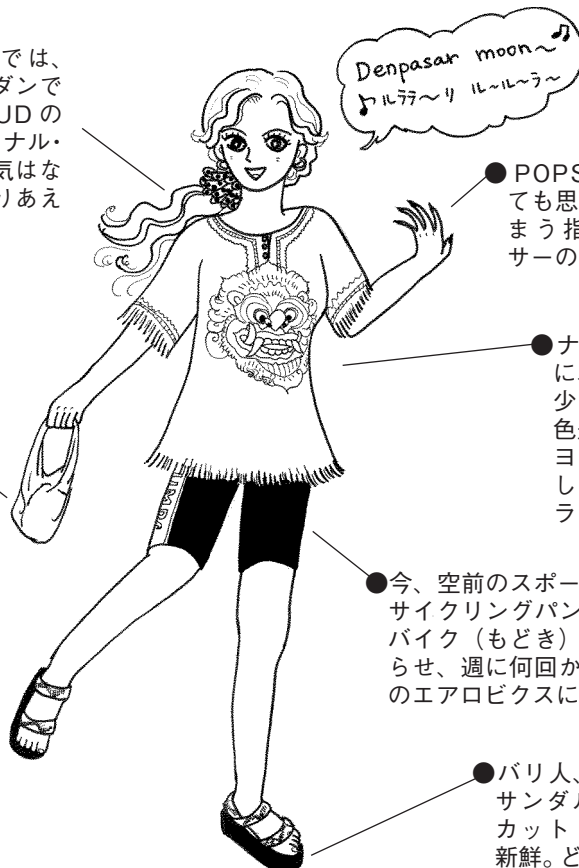
UBUD のギャルは今…今…いや、別にどうということはありません。すみません。大げさなサブタイトルをつけて。

昔も今も、よくバリの女の子は、メンタル、フィジカル両面で保守的だと言われますが、最近は少しづつですが昔と変わってきているようです。たとえば今までぜったい見せてくれなかったスラリとした美しいおみあしを、けっこうショートパンツ姿で見せてくれるし、外国人男性と結婚するコも、ポツポツと出てきました。こうした変化が良いか悪いかは別として、今後の UBUD の女性の活躍が楽しみです。というわけで、UBUD の平均的な、いえちよっぴりおしゃれなギャルの典型として、プトゥ・アリアワティ（仮名）20 歳に登場してもらいました。彼女の夢は 25 歳までにお金持ちのハンサムなダンナ

をみつけること（ひええ現実的!）、趣味はサイクリングと音楽をきくこと、苦手なことはお供えものづくり（将来に期待!）だそう。そして彼女が身に付けているもろもろの品が、ただ今（1994 年 2 月現在）UBUD で流行中のモノです。こちらで買っ揃えて、この夏は日本で着れば、バッチリキマリ! …でもないか。

●デンパサルあたりでは、ショートボブなどがモダンでよしとされるが、UBUD のギャルは、トラディショナル・ロングヘアを切る勇気はない。でも、パーマはとりあえずかけてみた。

●最近セゴール（ナイトマーケット）が閉鎖のままなので、しかたなく夜はナシ・パダンをブンクスして帰る。



●おそらく BALI だけで爆発超ヒットの POPS、タイトルも「デンパサル・ムーン」。フィリピンの歌手 Maribeth が英語で悲しげに、そしてセクシーに唄う。どこに行っても聞こえ、誰でも一日一回は口ずさむ程の人気だが、サビの「Denpasar moon~」以外の歌詞は英語なので誰も唄えず、あとは「ラリラ〜ラ ララ〜」となってしまう。

●POPS を唄っていても思わずそってしまふ指。バリダンスの宿命か…。

●ナゾのバロンシャツ。一日に、これを着ているバリ人に、少なくとも 10 人は会う。各色豊富な色揃えに感心。レーヨンの薄い生地が涼しいが激しい色落ち。ちなみに背中中はランダである。

●今、空前のスポーツ・ブーム。で、サイクリングパンツ。マウンテンバイク（もどき）をさっそうと走らせ、週に何回かはギャニアールのエアロビクスに通う。

●バリ人、観光客ともに愛用率高いサンダル。少々厚めのゴム底、イカット（織物）のひもがなんだか新鮮。どこでも買える。軽くてよい。

懐かしのセゴール

絵と文 なみきあきこ

サテアヤム、ナシゴレン、ミーフンゴレン、イカンバカル…いつかメニュー全品制覇してやるぞーと思っていたのにいつの間にかあのきちゃんいセゴールの屋台はなくなっちゃったんですね。残念残念、今思えば、あそこでいろんな人に出会ったなあ…。

由美子さん元気ですか？ いっしょにマドラ (MADURA) でサテアヤムとソトを食べましたね。私達があんまり昔のお笑いTV番組の話に夢中になってケラケラ笑っているものだから周りのバリ人は遠まきに誰も話しかけてこなかったけ…。(そりゃそーだろな。)

広場のまん中には赤い敷物しいた変な笛を売っているおじさんがいて、足もとではひふ病にかかった犬対かじられてはんぶん耳のない犬がメス犬のとりあいのけんかしてて、夜だからよくわかんなかったけど、けっこうきたない所でごはん食べてたのね。でも味はどこもGOOD^{パグース}だったよ。

マドラのサテと言えば…ニョマン君、元気にジゴロ業やってますか？ あなたと会ったのもあそこでしたよね。私はバックツアーではじめてのBALIで、2日目の夜に屋台の向かい座ってたっけ。すごく甘いマスクで、笑うとポトンギギされた白い歯が見えてきつとどんな女の子も好きになっちゃうようないい男でしたね。次の日にニョマン君のお宅でクバヤ着せてもらって、にわかヒンドウ教になってベサキのオダランにつれてってくれましたね。私はブッディストだということにお清めもしてもらって私達(その時私は男連れでした…)はとってもHAPPYでした。それをきっかけに私、BALI・UBUD病にかかっちゃったんですね…きつと。私は君のこと忘れてないよ。だってマーケットで私の横には彼がいるというのにテーブルの下で足をすりすりさせてきたんだもん。私もきつと一人だったらころつと行ってたのかなあ…。(ないしょだけど♡)

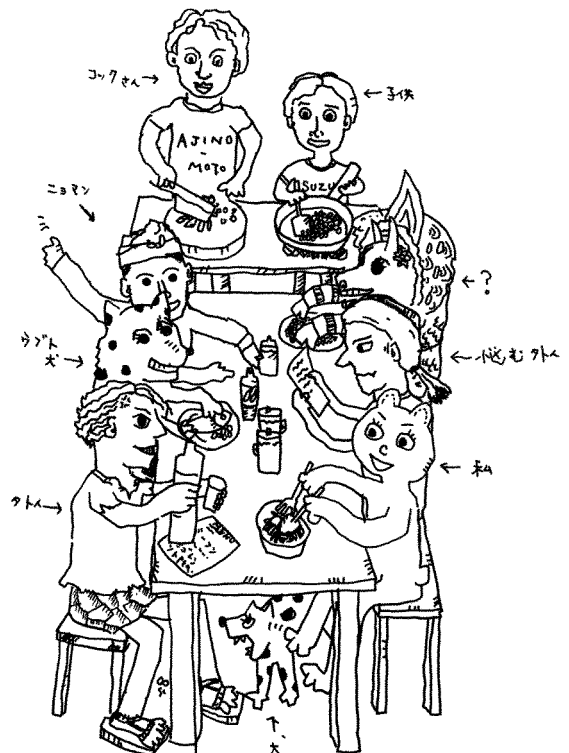
マーケットの裏道で出会ったバリ人についての本を書いているといていた男の子、実家のそばでオダランがあるからってさそってくれたのにバリ人に

ホイホイついてっちゃダメッなんてけっこう用心深かった私は結局断っちゃったけど、あの時はごめんね。ミーゴレンおごってくれてありがとう♡がんばって作家になってね。

カナダ人のジェフリー君(まるで松田聖子?)いっしょにマーケットの前歩いてた時、“きたない、おなか痛くなる”って言ってたけど、いっしょに食べたアマンドリのDINNERとマーケットのごはんは(ちょっとおなか痛くなるかもしれないけど)同じくらいおいしいんだぞ！ 私が無理やりつれてっっちゃえば良かったね。

そんな様なけっこう楽しい思い出のあったところだからナイトマーケットが無くなっちゃって犬も私もちょっと悲しいけど……UBUDもどんどん変わってゆくんだね。セゴールの屋台くん、おいしいごはんといろんな人に逢わせてくれてありがとう。

UBUDフェチのあきこより。チャオ♡



さすらいのギャンブラー



photo: E. Sugawara

♪え～さあ～て～わ～♪この～ば～の皆様え～♪
で始まる、河内音頭で有名な河内を舞台にした映画、「河内のおっさんの歌」をご存じですか。20年以上も昔の映画で、すでに記憶にないかもしれません。主演は確か川谷拓三さんだっただと思います。極道者が多い村を舞台にした…といった映画のその中で、ちゃぼによる闘鶏シーンがよく出たことを覚えています。かつて日本にも、闘鶏は各地方で盛んに行なわれていたようです。しかし、今では見ることはできません。河内出身の人がこれを読んで、極道者とは何事かと、お叱りを受けそうですが…、極道者とは、道楽を極めた人のことであり、言うならば「はぐれ雲の旦那」のような人物のことを言います。こう言っても治まらない人は名乗り出てください。是非とも本場の河内音頭が聞きたいと思っておりますので、その節にはよろしくお頼み申し上げます。

バリでは現在も闘鶏は盛んに行なわれています。バリの闘鶏は、神聖なる供物として、下界の神々である鬼共に、鶏の数滴の血をもっておさめるという儀式であり、様々な儀礼 (Upacara) にかかせないものであります。しかし、それはたてまえであり、かなりギャンブル色が強いなど感じるのは、彼らに悪いかな。ここ UBUD も極道者の多い村のようで、毎日と言ってよい程どこかで闘鶏が見られます。純粹に儀礼として行なわれる闘鶏、また、純粹にギャンブルとして行なわれる闘鶏があります。

バリではなんといってもギャンブルの＜花形満＞（これは漫画：巨人の星／星飛馬のライバルの名前です。これを知ってるあなたは思い込んだら一徹

の人ですね）は闘鶏であります。インドネシア語で Subungan Ayam、バリ語では Tajen と言います。バリの闘鶏の特徴として、鶏の足にタジという鉄の鋭利な爪をつけるため、勝負が一瞬のうちに終わってしまうことが多いようです。気の短い人には、うってつけのギャンブルかもしれません。

Mas の村では、ガルンガンに大きな闘鶏が行なわれます。Kalangan と呼ばれる闘鶏場には、五百人程の男達が見守る中で、お金は賭けられます。ギャラリー、ホテル、レストランなどお金持ちのオーナーがごぞって参加します。今年の闘鶏には遠くロンボクより駆け参じた中国系のお金持ちがいたそうです。鶏、持参で駆け付けて数千万 Rp を負けて帰ったそうです。

他のギャンブルとしては、Ceki という麻雀のカード版のような物、ドミノカードを使う Dom（通称ドミノゲーム）と、Blokyo（9に近い数字が強いという、日本のカブと同じ）があります。祭礼には、Kocokan（下に敷いた布の絵柄にお金を賭け、胴元が転がした大きなサイコロの絵柄をあてる）というゲームがよく出ています。そして大きな祭りには、Capdeki（胴元の隠し持つ一枚のチャイニーズ・カードを当てるのですが、これが最高10倍まであり、かなりの大金が動きます）と言うゲーム見ることもあります。これなどはかなり緊迫するものがあり、東映のヤクザ映画の一場面を見ているような気迫を感じます。

いずこの国も、ギャンブル好きはいるもので、ここバリでもギャンブルで財産を失ったという話は聞いたことがあります。インドネシアはギャンブル禁止ということをお覚えておいてください。くれぐれもギャンブルには注意注意。



BALI の犬

初めてBALIに来て目に飛び込んだものの一つに「犬」があった。それは日本で見慣れた犬の姿ではなく何か別の生き物のようにも感じた。皮膚病で、ほとんど毛が抜けてしまい、しわしわの皮膚だけになってじーっとしているものは、「ムーミン」をかわいそくした様な感じだった。

目がくぼみ、あばら骨、腰骨がでてしまって、情なさそうに歩いている姿は、精気がなく、まるで抜け殻だった。

頭や耳の後ろなどに傷を負い、それがバックリ口を開いてハエにたかられながら歩いたり、車がバンバン通る大通りで頭から流血して死んでいるものもいる。

BALIの人々の犬に対する感覚は違う。「ペット感覚」はまだほとんどない様だ。最近では、わざわざキンタマーニで生まれた犬を買って、かわいがる人の姿も見erようになったが、(かわいがるのは小犬のうちだけで、成犬になるといつのまにか相手にされなくなり、いつものパターンをたどる)他国で見られるようなそれとは違う。

つい3年前までは「ただ家に住みついている」くらいに思われていたそう。昔は今ほど暮らしては豊かではないので犬にやるエサなどない。多くの犬は飢えていて、人々の汚物を食べていたそう。

ちょうど「共存」の関係になるので、人々は別に犬を追い払うわけでもなく、住みついたらそのまま、犬が急にいなくなろうと、死のうと別に驚かない。この昔からの「汚い」という観念が根強く残っているので、未だに人々は犬を近くに寄せ付けたがらない。犬が人々のそばに座ったり、食べている時、吠えたり手をかけて催促しようものなら「チェツェツ」と叱られる。人が食べている間は、じーっと食い入るように目で訴えて待っている。つい、

こらえきれずによだれを垂らしている姿もよく見かける。

[K]の家で宴会をした時、[K]が飲み過ぎてゲーゲー吐いてみんなが介抱する中、[K]の犬はその汚物を食べていた×××という話を聞いた時は、さすがに笑ってしまった。

家では、わりと隅の方に追いやられて脇役の犬。そんな彼等にも昼と夜の顔がある。昼は暑いので、日陰のコンクリートの上やWarungの長椅子の下など、できるだけ涼しくなろうとそれぞれ場所を確保して寝ている。Sore(夕方)は、友達犬と遊んだりしてついでにゴミをあさって、食べ物を探したりしている姿をよく見る。そして、涼しくなった夜は、人通りも減るし、犬達にとってまさにHappy hourだ。各縄張りの道は犬達の社交場と化す。犬達は急に強気になる。そしてゴンゴン(日本はワンワン、パリではゴンゴン)とはしゃぐ。

BALIの夜道では、強盗より犬に囲まれることの方がはるかに多い。何匹かで吠えたり向かって来たり、自転車やバイクで通る人を追いかけてもする。実際、咬まれた人もいるし、あなどれない。一人の時囲まれると、けっこうこわいのだ!!

首輪でおもしろいのを着けている犬がいる。黒いメス犬で、以前はペンキの空き缶をぶら下げて、ガチャガチャ言わせて歩いていたが、今度は牛用の木のベルをぶら下げていて、最近では牛用のベルでアルミ製に変わった。人間なら大きなリボンというところだろうか…。彼女は雄犬がいると意識しているのか、ちらちら振り返りながらその周りを歩いたりする。うちの庭にも来て、我が愛犬Cium君に流し目をくれたようだが、Ciumはあんまり興味を示さなかった…。

他にも、いらなくなった布を着けていたり、人が使うベルトをしていたりするものもいる。

ある時、道端で座っているヒョウ柄の犬がいた。よくよく見てみると、飼い主が柄を描いたようだった。BALIの人の発想には、時々笑ってしまう。想像力豊かというか…。ヒョウ柄も首輪も彼等流のかわいがり方なのかもしれない。

BALIの人は、「あの子は犬のようだねえ」と犬に例えて言う事がある。"小犬の時はかわいくて人気者だったけど、大きくなったら特にかっこいいわけでもなく、biasa(ふつう)だ。別に特別視されない。"…などという意味だそうだ。

BALIでは儀式で"生贄"として、犬を捧げる事がある。まだ生後数週間の幼犬を、"生贄"として殺す。それには"一番かわいくて手放しがた

い時にも、執着を捨てて潔く神に捧げる事が大切だ"という意味が込められているようだ。

供物を犬が食べにきた時、別に叱られることもなくそのままだった。しかし、同じようにネコが来て食べようとするのでピシャッとたたかれて叱られていた…。

犬は"汚いけどSuci(聖なるもの)"なので、供物を食べても許される。だから寺の中へ入ることも許されている。

犬はなぜSuciなのかというと、犬は一つの物語を持っているからとの由だ。その物語によって、犬は汚いけど"Suci"とされるようになったらしい。

昔々、あるところに一人の将軍がおりました。その将軍は天国を目指して長い旅をしておりました。彼はずっと一人で歩いていましたが、いつからか一匹の黒犬が黙ってついてきました。将軍と黒犬はずっと一緒にやってきました。天国の入り口についた時は、将軍と黒犬はすっかり仲良しになっていました。

天国で待っていた神様は、将軍を出迎えて「さあ、早くお入りなさい。しかし、その黒犬を入れることはできない。」と言いました。将軍は「いいえ、この黒犬は私の大切な友達なのです。もしこの犬を入れないとおっしゃるなら、私も入りません。」と言いました。神様はしばらく考えて、「よし、そこまで言うのなら犬も一緒に入れることにしよう」と、黒犬も天国に入ることができました。その後、デワ・インドラという神は、犬に姿を変えたとされています。

-- めでたしめでたし --

BALIの犬は放し飼いで、それが犬にとって良くも悪くなることもある。呼吸するのもやっとの犬を見たりすると、時々悲しくなってしまう。しかしこれも、ありのままの"生"なので仕方がない。みんな頑張って生きてほしい…。



カール君のある日

堀 祐一

以前自転車をレンタルして乗り回したあげく、日射病になりかけてこりごりしたカール君は今度はレンタカーを借りることにした。車なら行動範囲も拡がり、遠く離れた村や海にも出掛けられるからだ。

白くてピカピカのジムニーのレンタカーが店先に置いてあるレンタカー屋さんで手続きをすませ、さてと思っていたらこの車ではないらしい。どこからか到着した別のこげ茶色のジムニーを指差される。ちょっと見てくれはきたないが、まあ仕方がないなと、そのこげ茶色のジムニーで早速ドライブすることにした。

店先から発進しようとするが、なんとマニュアルシフトである。オートマに慣れたカール君は2度程エンストしたあげく、ガクガクとメインストリートへ向かった。前をバイクが3台ほど道に広がって走っていると思いきや、右からも左からもバイクがすり抜け、周りをバイクで囲まれてしまい右往左往するうちに二人乗りのバイクの後部で籠を頭に載せたおばさんにわけのわからないバリ語で罵倒されとりあえずはあたふたと道を曲がった。すると市場の前なのであるが、すごい人だかりである。歩行者とベモとバイクと犬の中を、慣れないクラッチと格闘しながらなんとか通り抜けたカール君は、とりあえず村を出てもっと山の方のライステラスを見に行こうと決めた。

村のはずれで飛び出してきた鶏にびっくりしてバクソのワルンに突っ込みそうになったが、なんとか難を逃れて空いた道に出た。いくらか慣れてきたところでよく見るとガソリンがないではないか。そうか、バリではガソリンを空にして貸すのだと思い当たりながらもガソリンスタンドが見当たらない。道の脇に停車して買ったばかりの地図を見ると、幹線道路にガソステーションのマークがある。てなわけでまずはそこを目指して行くことにして幹線道路へ出た。出た途端、幹線道路ではどっひゃ〜、というほどの勢いでトラックが追い抜いていく。反対側

からもウインカーを点滅させながら車線をはみ出してトラックが爆進してくる。ゲームセンターのゲームのように手に汗をかきながらクリアして、なんとかガソステーションに辿り着いた。ほっとしながらガソリンを入れてもらおうとするが、バイクばかり入れていてこちらに来てくれない。見ていたらどうやらガソリンを入れてもらうには自分でフェューエルキャップをはずさないといけならしいと気づく。そこでキャップをはずして待っていると入れる順番がきた。値段を聞こうと思っていたら柱に書いてあったので安心して満タンにしてくれと頼む。55リッターも入ったのでずいぶん入るもんだと不思議に思いながらも金を払い車に乗り込む。ちらりと見るとメーターを戻さず続けてバイクに入れているのではないか。なんとなく納得してそのまま発進。いよいよライステラスに向けてドライブだ。

しばらくの間トラックやベモに追い越されながら走ると、いよいよ登り坂が急になってきた。追い越していったトラックのスピードも落ちてきてペースは楽になってきたなと思いきや、どす黒い排気ガスをババツと吐き出して今度は前を塞ぐかたちになった。しばらくがまんして後に着いていたが、後ろからきたベモがさっさと追い越していったのを見てカール君も追い抜くことにした。カーブが続くのでなかなか追い越すチャンスがなかったが、えいやとばかり気合いを入れて抜こうとしたら、抜き去る寸前に対抗車がいきなり現われて少しちびってしまった。

その後はなんとか無事走り、山を越えたところで子供たちの挨拶の掛け声をくぐりぬけて小さな村を通過し、ひろびろとしたライステラスの中ののんびりとしたところへ出た。脇道へ曲がって車を路肩へ停めて美しいライステラスを眺め、しばし休憩してから出かけようとしたら車が動かない。何と、タイヤがぬかるみで空転してスタックしてしまっている。周りを見渡しても誰もいない。悪戦苦闘しながら

ら脱出を試みるが失敗。どんどんはまってしまって途方に暮れているところにトラックが通り掛かったので、助けを求めることにした。トラックに乗っていた若者たちは面倒くさそうにして先を急ごうとする。しかたがないのでお金を出してお礼するからという、突然わらわらと車を押してあっさりとしてくれた。5人で押してくれたので一人あたり1万という出費となったが、まあ、ここで夜まで足止めをくろうよりはいいかと納得する。

その後はぬかるみにもはまらず快調に走っていたが、とある村にさしかかったところで渋滞。全然動かない。バリでもこんな渋滞があるんだなと思っていたら、どうやらオダランの行列である。前も後ろも動けない状態でオダランの祭時が終わるまで待つ。やっと道があいたのでまたしばらく走ると今度は突如の雨。雨期のせいかすごい量の雨だが、ワイパーがほとんど役立たずのフスケもので前がよく見えない。とろとろと走っていると、なんだか道が川と化していく。だんだん水位が高くなり道と水路は完全に隔たりがなくなり、どこが道路なのか区別がつかなくなってしまった。しかたがないので車を安全とおぼしきところに停めて食事しながら待つことにする。見ているとバリの人々は膝まであるような水に溢れた道路でも車やバイクでどんどん走っていく。

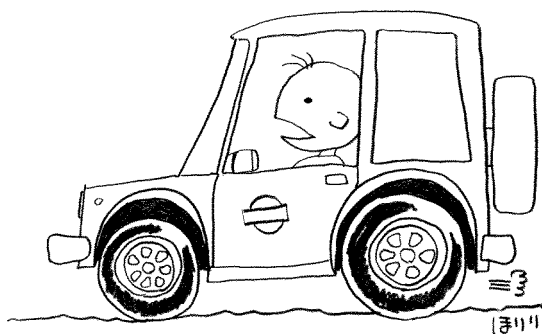
ワルンでなかなかおいしいチャンプルーを食べていると雨もやみ、水もいくらか引いてきた。夕方になって陽も落ちてきたので帰ろうと思い、車を出そうとすると係員のような人がやってきて手を差し出す。どうやらここは公共駐車場だったらしい。Belapa?と聞くと人の顔をジッと見て2千だという。なんだか高いかもしれないと思ったが、ジッと見る眼に納得させられ払って出発。

帰路は来るときとは違った道を快調に走ってきたが、美しい夕焼けのあとはだんだん暗くなり、そのうち真っ暗になってしまった。かぼそいライトに照

らされた道は暗闇にはあまり有効ではなく、前のめりの姿勢で前方を確認しながら走っていると、なにやら道に木の枝が立ててある。ん?と思いつつ通り過ぎようとしたら道の左側に大きな穴!どっひゃーと左にハンドルを切ると砂利の山!かろうじてクリアするも、またまたちびってしまった。どうやら工事中だったらしい。

どきどきする胸がおさまったところで気を取り直して走ろうとするが、今度はまっすぐ走ってくれない。パンクである。暗闇の山の中で車から降り、空気の抜けたスペアタイヤをはずし、汗をかきながらジャッキを使ってタイヤを交換し、ふと見上げた月のない夜空には、まるで今日の出来事すべてを忘れさせるようなびっくりするほど見事な星空で信じられない量の星が瞬いていた。カール君はしばらくその星空を眺めてから、これもまたいい思い出だな、と納得して周りを振り返った時、暗闇の中になんとか得体の知れない何かを感じたので、またすこしちびって帰路を急いだのである。

*カール君は、平島 幹さんの「タン・ナビ・ナビ」からの特別出演です。あしからず。



サギ・詐欺・鷺

近頃バリで、小さなサギと大きなサギと白いサギの噂話をよく耳にします。

小さなサギは、クタなどのマネーチェンジャーに現われ、電卓のメモリー機能をいたずらして、小さなお金を持っていってしまいます。時にはガソリンスタンドのゲージにもぐりこんで、横見をしている隙に目盛を0でないところに移動してしまいます。こんないたずら好きな、可愛い可愛い小さなサギの話です。

大きなサギは、ちょっと犯罪まがいのことをしているようです。この美しいバリで、住みたいと願っている人々の夢を食べてしまったり…、心の優しい娘達の心を食べてしまったりします。これはちょっと悲しい悲しい大きなサギの話です。

白いサギは、Petulu という UBUD から少し離れた村に住んでいます。早朝6時、朝焼けに染まったグヌン・アグンの美しいシルエットを背景にして、白鷺たちはバリのあちらこちらへと、飛び立っていきます。そして夕方5時30分頃になると、この白鷺たちがいっせいに Petulu の村に帰ってきます。黄昏色に染まった大空に、編隊を組んだ白鷺が優雅でゆったりとした翼ばたきで翔ぶ姿は、バリの美しい風景の一つです。これは美しい美しい心やすまる白いサギの話です。

あなたは、どのサギがお好きですか？それはもちろん、美しい白鷺が好きだと思います。そこで白鷺の村 Petulu をもう少し説明させていただきます。夕方の5時30分過ぎ Petulu の村では、白鷺が椰子の木々という木々に鈴なり状態で止っています。数百羽、いやそれ以上になるかもしれません。椰子の木々が雪をかぶったように、真っ白になります。又、家々の屋根や道路は白鷺の糞で真っ白です。車も数分停っているだけで、白鷺のふん害にあってしまいます。今では、この Petulu の村も観光名所の一つとして数えられ、訪れる観光客も多くなりました。ここで注意事項を一つお伝えします。白鷺が村に帰ってくる前に、村に着いてもしょうがありません。

白鷺はいないし、ふんはかけられるでは「ふんだりけったりだ！」と憤慨したり、「白鷺の村でサギあったようなものだ！」とつまらない冗談を言うはめになってしまいます。白鷺がいないのに、ふんはかけられないだろうと気がついたあなた、あなたは賢い。しかし、それはそれ、これはこれ、なんだかわからないうちに話は次にすすんでいます。まるでサギにあったようだと言わないでください。

ところで最近、大掛かりなサギの噂話を耳にします。昨年末からクタなどでトランプ詐欺が横行しているという噂です。被害者は日本人観光客が多いようです。被害額も一件あたり50万円～250万円とかなり多額になっているようです。2年程前にタイ、マレーシアで流行していたことは伝え聞いていましたが、ついにバリまで魔の手が伸びてきたかと恐怖におののいてしまいます。手口は街角で声をかけられ家に招かれます。一通り歓談した後、トランプでもして遊びましょうということになります。ゲームの手ほどきをされ、始めは勝たしてもらいます。そのうち、友達と証する人物にメンバーが変わります。そこからがもう泥沼です。段々と負けがかさんできます。しかし泥沼からは手も足も抜け出せません。彼らの手口は、まるで人間の心理を見抜いているかのように巧妙なものです。くれぐれもこんな詐欺のペモ、いやいや口車には乗らないでください。怖い怖い、大掛かりなサギの話でした。





棚からバリダンス

志村ひろみ

そこには"バリ舞踊&音楽教室・ナタラジャ"と書かれた小さな看板が崩れかけた土門に傾いてぶら下がっていた。

「もしかして昨晚バレスで観た妖艶な少女の踊りの練習風景がここで見学できるのかも?!」とドキドキ気分でその門を潜り中へ入ると、そこは結婚式の真最中であった。元気のよさそうなダドン（おばあさん）がいきなり私を抱擁し、ナシチャンプルを持って成してくれた。満悦の笑顔で「また明日も来るんだよ。」と言ってくれた。

翌日もう一度そこへ出かけ、新婚の踊りの先生、ワヤン・カルタ氏に逢った。初めてのバリだったので、メチャクチャなインドネシア語で「踊りの練習風景を見せていただけませんか?」と私が言うと、氏はボコールを私の右手に持たせ、ペンデットを踊り出し、拙い英語で、「ユードゥ!!」と言った。「え?! 私は一言も踊りたいなんて言ったつもりは無いんだけど…。」

次の瞬間には私も氏の後ろでやっきになって見様見真似をしていた。二時間位そうしてクタクタになった私に氏は、「明日は六時でいいか?」とインドネシア語訛りの英語で言い残し、そっけなく自分の部屋に戻ってしまった。1990年8月のことである。

それから学生生活の全ての休みをウブドで過ごし、ひたすら踊りを習った。最長五ヶ月の滞在中には、氏の家で居候をしながら、スマララティのアユに教わったり、舞踊についての論文を適当に大学に送ったりして過ごした。思いおこせば現在まで11回位こんな生活を繰り返してきている。とにかくバリ舞踊に夢中。止められないのである。

上手下手は別として、日本では京都を中心に時々一人で踊らせてもらっている。山村の踊りや駅前の商店街、インドネシア人の経営するバー…etc。今はSTSI留学に向けて節約中なので以前のペースではウブドに通えないが、最近は三月末のとあるバーでの出演に向けて、ティルナ・ジャヤにしようかチョンドンにしようか、四畳半の部屋の中で練習に耽っている。近い将来は一人でなく、できれば誰かと一緒に踊りたいのだが…。夢はどんどん膨らむ一方である。

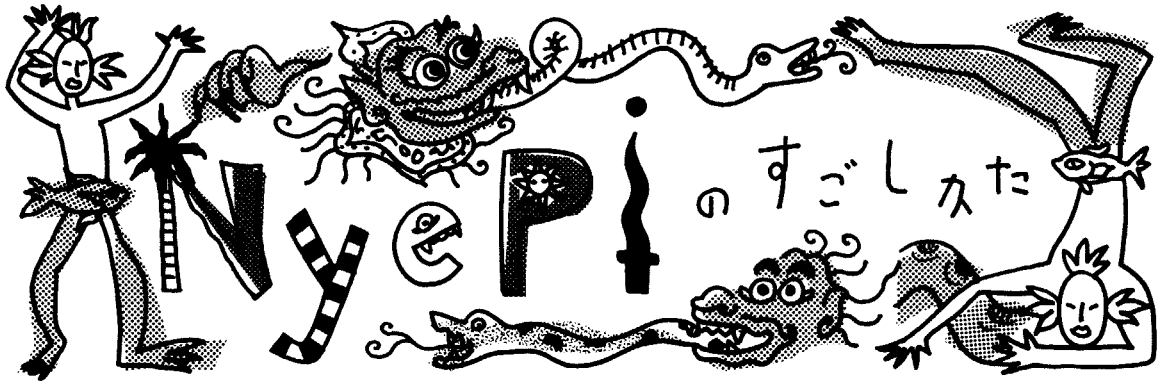
- おわり -

● Laporan Koresponden Khusus ●



昔むかし、BALIにまだ電気も車もオートバイもなく、夜は漆黒の闇でうめつくされ、きこえるのはただただ虫とカエルの声ばかり……今となってはそんな静かな闇はなかなか味わえなくなってしまった。UBUDのメインストリートでさえも、ほんの10年前はポツポツとほのぐらいランプがともる程度だったにちがいない。が、今はパカーッとオレンジ色の街路燈が輝き、とてもロマンチックとはいえない夜になってしまった。

雲のない夜に飛行機でバリを上空から見た人は御存知だと思うが、サヌール、クタあたりはキラキラと輝く光がまるで宝石をちりばめたように広がって、「あ、バリってこんなに都会(?)だったっけ」などと意外に思ってしまう。しかし!!一年のうちにたった一日だけ、BALIで私達は完璧な暗闇に出会うことができる。その日はNyepi(ニュピ)。バリの二種類の暦の、サカ暦つまりほぼ太陰暦に近い暦で、一年に一度めぐってくる。



イラスト：柚木美里

このニュピについては、ガイドブックなどでいろいろ書かれているが、その真意と実体については実際に体験しないとピンとこないだろう。ちなみに、バリ人御用達のバリカレンダーに書かれている説明を訳してみた…。

『ニュピの祝日。サカ暦で1916年の新年。この日は4つのこと(火を使わない、働かない、外出しない、殺生をしない)を守る。精神を集中させ、心おだやかにし、世界の平和を、最高神イダ・サンヒャン・ウィディに祈る。』

さてこのNyepi、バリ人はどう過ごすか…、そしてツーリストはどうのりきるか。

ここで日本人観光客、H君の例をとって解説していくことにしよう。

UBUDの、とあるホームステイに投宿しているH君、宿のイブ(お母さん)が忙しそうに大量の供物をつくっているのを見て、喜々として写真に納めながら、「いやあ、素晴らしいお供え物ですねえ、これは何のお祭りに使うのですか?」とたずねる。イブは、「あれ、あんた知らないの?あと5日後に、Nyepiなんだよ。」と答え、H君はそういえば以前ガイドブックでよんだことある「ニュピ」なる日の事を思い出すが、その日がいったいどんな日なのか。

いまいちわかっていない。イブはさらに、「その日はまる一日、ノー・イート、ノー・ライトなんだよ。」と、何かの標語のように言い、H君は「ノー・イート、ノー・ライト??」とますます疑問に思い、親しい日本語のできるバリ人にたずねてみると、どうやらその日一日は外出しちゃうダメ、ランプをつけちゃうダメ、ということらしい。

「外出ダメって、その日ゴハンはどうなるのかなあ」と不安を感じつつ、とうとう Nyepi 前日。明日の食糧確保のため近くの雑貨屋を覗いていると、どうもプリ・サレン（王宮）のあたりがさわがしい。「何ぞや?」と思いかけてみると、「ひええ〜っ!!」高さ3mはあるとか、ハリボテでリアルにつくられた怪物、血を口からしたたらせた化け物、そして首がぐるぐる動く巨大なランダ（悪の化身）…、何体ものオカルトハリボテが、おみこしのように大勢のバリ人にかつがれ、通りをねり歩いて、いやねり走っているのではないか。どうも明日の Nyepi を前にしてのパレードのようなものらしい。それをとりまく黒山の見物客、バリ人、ツーリスト達も押すな押すなの大混乱。H君がちょうどバッグの中にあつたカメラを取り出して必死に撮っていると、なんとオカルトハリボテの一体が、こちらに向かって突進してくる。早目に逃げればいいものを、H君は「今がシャッターチャンス」とばかりふんばつた。おかげでハリボテをのせているイゲタに組んだ太い竹の先にしこたま頭をぶつけられ、思わず失神しかけ、そばにい

たバリ人に、「あんな危ないところにいちゃいかん」と怒られながら宿まで送ってもらはめになった。

タンコブができた頭をおしぼりで冷やしていると、突然、庭から「ガンガンガンガン」という耳をつんざく金属音。再びH君は「何ぞや?」と思ひ庭に出てみると、宿のおばあちゃんが火をつけたたいまつを持って家の敷地内をくまなく巡り、その後からナベを棒で叩きながらイブがついて歩いている。

イブに尋ねると、「家中の悪霊を追い出すため」なのだそうだ。

そして一夜明け、いよいよ Nyepi 当日。

H君が起きてみると、いつも聞こえるはずの近所の子供達がさわぐ声、裏の路地をとばすバイクの爆音などがいっさい聞こえない。

まったくの静寂。イブがいつものように朝食を持ってきてくれる。「ほんとうは、今日一日、火を使うのもダメなんだよ。だからほんとうは料理もダメ、あ、タバコもダメ。」とイブは言う。「今日はサカ暦の新年だから、みんな今までの一年の反省と、これからの一年の幸せを祈って、ほんとうは一日何も食わずにじっと座って瞑想するんだ。ホレ、あそこの部屋の前でおじいちゃんも瞑想しているよ。それに今日一日、静かにしていないと、昨日追い出したはずの悪霊がまた戻ってきてしまうのさ。」…。

H君はなんだか神妙な気持になり、「よし、今日はほくも一日静かに瞑想でもしてみよう。」と思うのだった。



お昼になると、イブが、「ほんとうは料理もいけないんだけどね、タム（お客さん）はかわいそうでしょ。」とごはんを持ってきてくれた。ふだん瞑想などしたことのないH君は、そろそろおなか为空いて精神集中どころではなくなっていたので、喜んでいただくことにした。あとで知ったことだが、宿によっては、泊まり客にもいっさい食事を出してくれないところもあるそうだ。

さて、おなかもくちくなり、あまりの静けさのためもあって、早々に昼寝を決め込んだH君、突然さわがしくなった外の声で目をさました。またまた「何ぞや?」と思って庭に出ると、ホームステイの家族みんながはしゃぎながら表の通りに出ていくではないか。「?? 今日是一日静かに、外出はダメって…?」タンコブがまだズキズキ痛む頭を抱え込んでH君が理解に苦しんでいると、宿の高校生になる息子が、「H! さあ、一緒に通りまで出ようよ、え? 外出禁止? ハハハ、夕方の一時間くらいは外に出てもいいんだよ、だって川でマンディしなきゃいけない人だっているんだぜ、さあさあ、道に出て、チェウェツ（女のコ）でも眺めてこようよ。」

そういえば昼過ぎまでじっと座って瞑想していたおじいちゃんが、家の門の階段にしゃがんで、タバコを吸いながら隣の家の人と大声でおしゃべりしている。H君、ますます頭が混乱。今日是一日、静かに、神妙に瞑想する日ではなかったか…。

そして夕暮れ。通りに出ていた人々もすっかり家に帰り、イブが用意してくれた早目の簡単な夕食を済ませると、いよいよ経験したこともない完璧な暗闇と静寂がやってくる。さすがにバリ人はみんな早目に床につくらしい。いやに調子はずれのニワトリの音が響く。H君は昨日から用意してあったろうそくに火をともし、本でも読もうとベッドにころがるやいなや、どこからか、「コラ! 灯りが外にもれるぞ!」と誰かの声。そうだバルコニー側の小窓は竹の格子だけでカーテンがないのだ。あたりのあまりにも暗い闇のために、ろうそく一本でお目立ってしまうのだ。H君はふと思いついて、ろうそくを消し、暗さに目が慣れてくると、そーっと手探りで部屋から庭に出てみた。

すると!! ああ、なんという星空の美しさ! 運良く空には雲がなく、信じられないくらいの数の星々が、いっせいにまたたいている。まるで自分が宇宙



空間に放り出されたみたいだ。足もとでカエルが、遠慮深く「ケロ」と一声鳴いた。H君は我を忘れてしばしその場に佇むのであった。

この体験以来、H君は次のバリ旅行も必ずNyepiに合わせて来ようと心に決めている。だってこの日は太古の暗闇と静寂にタイム・トリップできるのだ。こんなこと、他のどこで味わえるというのだろうか。…というわけで、すっかりNyepiファンになってしまったH君なのだった。

これは余談になるが、あの高級リゾート、そして別世界でもあるヌサ・ドゥア・エリアでは、こともあろうにNyepiの日でもいつもと変わらずライトが煌々と輝き、ツーリストはいつもと変わらぬホテル・ライフを過ごせるそうだ。そして、あのビーチ・リゾート、クタでは、ひそかに営業するレストランもあるという。「ええい、そんなところはバリではない!!」とお怒りなるのはごもっとも、でもそんな融通がきいてしまうのもまたバリの一面なのかもしれない。

とにかくそんなわけで、運良く(?)旅行の日程がNyepiにあたる方、ぜひこの日はUBUDで過ごされてはいかがだろうか?

ちなみに今年のNyepiは4月12日、来年は…、来年のバリカレンダーが発行される12月頃、早々にこの極楽通信でお知らせすることにしよう。

ではみなさん、Selamat hari raya Nyepi!!
(ニュピ--新年--おめでとう!)



ももたろうバリ日記 [1]

ジェロ・チャンドラワティ

バリに「抱き癖」という言葉はない。なぜなら、バリのすべての赤ンボがそうだからである。またそうなったところで、いっこうにへいちゃら、バリの人々は老若男女を問わず、皆赤ンボをあやすことが心底好きなのだ。実際、全身カラフルな模様入り(入れ墨)の普段はクールな色男が、赤ンボを見たとき「べろべろばー」する姿は、いっぷくの清涼剤と言えましょう。(そうかな)とにかく抜群に赤ンボを喜ばせることに長けているのがバリの人々である。

そこでは、と困るのが日本人母であった。ちょっとやそっとの刺激では、もはや赤ンボには効かないのだ。バリの人々の派手なパフォーマンスを前に、控えめな日本人にはなすすべもない。しかし私も母、負けてはいられぬ。おのずのテンションは上がる。とは言えバリの皆さんは交代で波状攻撃的に「べろべろばー」できるが、とりあえず母は私一人であるからしてそうそう年柄年中べろべろしてもいられない。サボっているとはいえ自分の仕事もあるし、締切り迫る『極楽通信 UBUD』の原稿も書かなくてはいけない。だいたい一日中テンションを上げていては、ただえでさえ暑い熱帯安楽椅子で脳病になってしまう。そこで母としては一人遊びもできる賢い子に育てたいわけだが、バリの人々はそれを許さない。あっという間に隣のおじさんとかが赤ンボをさらっていってしまう。子は近隣の宝。かくて赤ンボは母→伯母→祖父→母→祖母→隣人→と、回る回るよスクロール、一族郎党御近所へ「べろべろばー」ツアーの楽しい毎日を送ることになる。こうして育った子もまた赤ンボを喜ばせる天才となり、これがバリの人好きのする明るさを生んでいるのなら、この「抱き癖」もまた良きかなと思う今日この頃ではある。

さて我が子ももたろう(百太郎と書きます)は、1993年9月27日、デンパサールの陸軍病院で生まれた。驚きの3900g。あと一息で巨大児のタイトル獲得であった。ニンプの間の経過は順調で、体重もわずか8Kg増。腹囲はサボって測らなかったけど、バリの産婆さんによると「ヤモリの腹のように」小さいとのこと。これは

ラクラクさっと、たかをくくるニンプの私。しかし予定日を二週間も過ぎようというのに、いっこうに赤ンボの出てくる気配がないのである。私の行きつけの産婆さんは信頼のおける気持の良い女性だったが、帝王切開の可能性もあるとのこと、事故でもあったら大変と、結局病院送りの身となった。久しぶりのデンパサール、ティアラ・デワタでお買物…などと一向に呑気なニンプだったが、診察室に入ったときとたん硬直してしまった。なんと目の前に只今出産中の人。温泉旅館の宴会場ほどのスペースに分娩台が4台。横たわるニンプ3人。壮観である。うむと唸る私。のたうつニンプはトドのよう、歩き回る女科長はサディスティックな軍服姿。安宿のドミトリーでもあるまいし、こんなオープンな環境で出産なんてできるのでしょうか神様。

しかし12時間後、自分もトドの仲間となってからは、まさにライブの手本がお手元。ものは考えようである。思えば外国暮らしとなってから、発想の転換と言えば聞こえは良いが、ようは大雑把、ほとんどこれでバリの生活を乗り切ってきた。ところがさすがの日本製大雑把にも容易に乗り切れそうもない裏技をバリは隠し持っていたのである。(つづく)



JALAN²



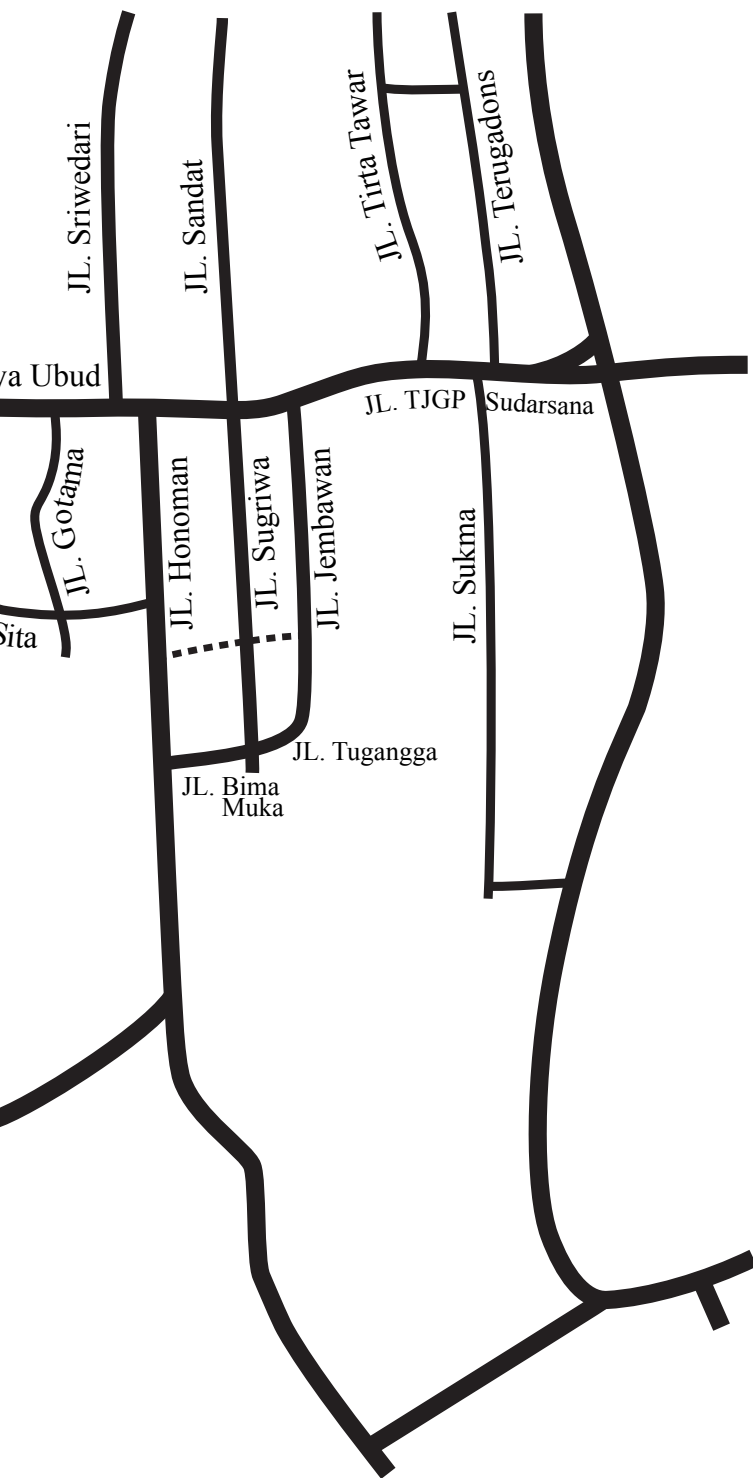
インドネシア語では、単語一つの意味と単語二つを繰り返す時の意味では、まったく違った意味になります。JALANは「通り」を意味します。そしてJALAN-JALANと二度繰り返すと「散歩する」という言葉になります。JALAN-JALAN (ジャラン・ジャラン) とは、なんと心地好い響きでしょう。しゃなりしゃなりとすまして歩くわけでもなく、ジャラジャラと騒がしく歩くわけでもなく、まさにジャラン・ジャランと散歩するといった感じがぴったりの言葉です。

インドネシアでは、それぞれのJALAN(JL)に名称がついています。デンパサールにはチモール、スンバ、コモドなどインドネシアの島々の名称がついていたり、ドリアン、ナンカ、ランプータンといった実のなる木の名称がついていたりユニークです。

JL:PACAR= 恋人通りなんて粋な名称もあります。きっとロマンチックな雰囲気を通りなのでしょう。

それでは、憧れのUBUDにはどんな名称のJALANがあるのでしょうか。1946年の独立戦争の時の英雄、94人の勇士のうちの2人がUBUD出身で、彼らの勇気を讃えて名称が使われています。その他には、さすが芸能の村だけにラーマヤナ物語とマハバラータ物語より引用した名称がたんくさんあります。





それでは、UBUDのJLを調べてみましょう。まずはメインストリートです。メインストリートはJL:Raya Ubudと呼ばれ、UBUD大通りという意味です。それを挟んでKaja(山側)とKerod(海側)とにJLがのびています。バリ語には、東西南北という方位を表す言葉がありません。そこで、UBUDでは便宜上、山側を北、海側を南と言っているようです。

JL:Raya Ubudに揚げられている名札の全てをここに記しました。勇士からの名称は、JL:KajengとJL:Suwetaです。ラーマヤナ物語からは、JL:Jembawan, JL:Sugriwa, JL:Hanoman, JL:Rama sita, JL:Bima Muka, JL:Tuganggaがあります。また、マハバラタ物語からは、JL:Sriwedari, JL:Goutama, JL:Karnaがあります。JL:Sandatは花の名です。通称JL:Monkey Forestは本名JL:Hutan Keraで、やはり猿の森という意味だそうです。以上がUBUDのJLです。JL:TJGP Sudarsanaはプリアタンの勇士のようです。JL:Sukmaは魂、JL:Terogadonsは川の名前だそうです。

JLの他にGANGという小道があります。JLからの横道をそう呼ぶようです。さらにGANGから横にそれた道をLORONGと呼ぶようです。これらにも名称はついています。

あなたはどこのJLのロスメンにお泊まりですか？

マンディを済ませて、夕焼けを見に、モンキーフォレストまでJALAN-JALANしてみたいかがですか。きっと思い出に残る素晴らしい景色を見ることができるでしょう。



Kedelai …… 大豆は哀れな優等生！

エナちゃんが子供の頃、家がそんなに裕福でもなかったのですが、毎日の食卓にのぼるお惣菜はおもに野菜でした。もともと野菜は大好きだし、近所の母親の実家が農家だったのでそれはそれはとれたてのおいしい野菜ばかりで、特に不満もなかったのですが、ひとつだけ一年を通じてよく食べさせられた、ちょっと苦手なものがありました。それは大豆。乾燥させたものはよく保存がきいて、「え～っ、またおマメえ?!」とぐずるほど、しょっちゅう出されたものでした。その頃はもっぱら大豆と小さく切ったコンブを炊いたものが多く、子供のおぼつかないハシ使いでは、大皿から自分のお茶碗にとる作業だけで憂鬱になったものでした。今でこそほんのりと甘い大豆のおいしさは、エナちゃんの好物のひとつですが、あの頃は「もっとたくさん食べると大きくなれんよ!」としかられながらイヤイヤ食べていた記憶しかありません。

でも大豆は高タンパク、低脂肪、ビタミンもいっぱい含まれていて、そのうえ「畑の肉」などという名誉ある別名までもらい、安価で日本の調味料の“顔”というべき、味噌や醤油にも変身する、おりこうさん健康食品なのです。そして、ここインドネシアでも彼、ダイズ君はりっぱな「優等生」としてがんばっています。日本と同じようにいろんなかたたちに姿を変え、活躍し、そして「え～っ、またコレえ?!」としばしば眉をひそめられてしまう、ちょっとカワイソ～な存在でもあります。

さて、第2号のこのコーナーでは、このタイズ君、インドネシア名「Kedelai」(クディレイ) にスポットを当て、彼のいじらしくも華麗な変身、5つの姿をここでご披露いたしましょう。

◆まず第一の姿。それは「Kecap asin」。ケチャップ、

と言いますが、私たちの国でいうトマトケチャップではなく、いわゆる“醤油”です。ほとんどのレストランや食堂で、テーブルの上にちょこんとっています。味は日本のそれとほとんど変わりませんが、香りは日本の勝ち。エナちゃんは、レストランでチキンや魚のバーベキューを食べて、なんだか味がもの足りない時、よくこのケチャップ・アシンをちょっぴりかけます。とてもごはんに合う味になり、グーです。

◆そして第二の姿。インドネシア版味噌ともいえる、「Taoco」(タオチョ)。味噌より塩辛く、ダイズのブツブツがそのまま残っているもので、もっぱら華僑の人たちが調味料として愛用しています。

◆そして第三の姿、「Tahu」(タフ)。これは読んで字のごとく、豆腐です。といっても、あのつるりとした日本のものと違い、もっとポテリと固い、パサパサした感じ。タフは生では食わず、揚げるか煮るかして調理します。ここでは、日本の絹ごしちゃんのようなデリケートな扱いは誰もしてくれず、製造元から冷蔵もされず水にも浮かべられず、ただでかい洗面器に並べられて市場で売られているのです。タフはいろいろ味や固さに微妙な差があって、エナちゃんは以前、どうしても日本の豆腐に近いものが食べたくなくて、ふらっと“タフをめぐる旅”に出たことがありました。UBUDの北にあるPejengという村でタフをつくっているというウワサを聞きつけ、ベモに乗り、訪ね歩いたいくつかのタフ屋さん。匂ってきました、あのタイズを茹でる甘い香り。大釜でやわらかく煮えたダイズを潰して、こして、型に入れて、と昔ながらの手作業でつくられていました。ただ豆のしほり汁(豆乳ですね)を固める時の凝固剤として、パリでは二種類のもの

使われているのがわかりました。ひとつは酢のような凝固剤。以前、タフ料理で妙にすっぱい味のを食べ、「ムムッ、これはもしや腐っているのでは……」とエナちゃんは疑っていたのですが、これで納得。そしてもうひとつ、おなじみの、海水から採れる“にがり”を使ったタフは、ほとんど味は日本のもめん豆腐。やや固めで、冷奴にはなれずとも、おいしいトーフステーキやいり豆腐が出来ます。

ここでひとつ、エナちゃんがたいへん驚き、そしてとても残念に思った事実があります。あるタフ屋でホカホカのできたてを味見している時、ふと部屋の隅っこにバケツにこんもりと積まれた“おから”（豆乳をしぼったあとのカス…、そう、あのおいしい“うの花”）を見つけ、エナちゃんは「わーい、あったあった、おじさんこれひと袋ちよーだい、いくら？」と喜々としてたずねたのです。そしたらタフ屋のおじさんは「えっ?! おまえさんブタを飼っているのかね?」エナちゃんは「??. ブタ?」………。そう、あのおいしい“うの花”が、うう〜っ、なんとここではすべてブタのエサになっていたのです。 “ブタのエサ”をざくざくとスコップ(!)でビニール袋につめながら、おじさんは「へ〜え、日本人はこれを食べるのかね」と神妙な口ぶり言い、別を買ったタフの袋といっしょに「エサはおまけだ、いつでもとりにおいで」とエナちゃんに手渡してくれたのです。その夜、そのブタのエサが、エナちゃんの晩ごはんのおかずになったことは言うまでもありません。

そんなこんなでタフは、厚揚げのように油でカラッと揚げ、チリソースとあえたり、カレー味の煮込みになったりして、UBUDに来るベジタリアン・ツーリストの絶好の御馳走になっています。手の

ひらサイズ、厚さ1cm弱のタフが1コ100ルピア、この経済的なお惣菜は家計のきつくなったバリの台所の助っ人として重宝がられています。そしてオダラン（寺院の祭礼）のときに出る屋台でもこのタフは人気者です。ふわふわに揚げたタフをハサミでちょんちょんと切り、茹でたもやしと青いとうがらしを刻んだものをふりかけ、とろっとしたピーナッツ味の甘辛いソースをかけたこの一品、軽い腹ごなしに最適。エナちゃんはオダランに行くと、必ずこれをいただきます。

◆さて、Tafuが長くなりましたが、次は第四の姿、Tempe（テンペ）。テンペはよく「日本の納豆のようなもの」と言われますが、納豆菌で発酵させていないので、あのネバネバも匂いもぜんぜんなく、まるでピーナッツで埋めつくされたホワイトチョコレートのような状態になっています。もっともチョコレートほど固くはなく、弾力があって、むしろその押しとへこむやわらかさを、バリではちょっと不名誉なたとえで使っています。バリ人がときどき会話の中で、「Dia mentalnya tempe!!」（あいつの肝っ玉はテンペだぜ!!）と吐き捨てるように言うことがあります。これはもっぱら男性に対して使われるようですが、要するに「ヘナヘナした、イクジのないヤツ」、つまり「キ〇タマが小せえ」ヤツのことを指して言うコトバだそうです。こんなたとえをされてしまうテンペは、あわれなことに台所でも決して高い地位にいないようです。テンペはタフに負けずに安価で、バリ人家庭ではしょっちゅう出されるおかずとして必ずしもみんなの好きな御馳走ではなく、どちらかというと「え〜っ、またテンペえ?!」と言われる、チケくさいお惣菜らしいのです。エナちゃんはこのテンペが実は大好物で、これさえあれ



ば一日三食でも OK！という大ファンなのに、まわりのバリ人は、もりもりとテンペごはんを食べているエナちゃんをチラ、と横目で見て、「そんなに好きだったら全部食べちゃいな、ボクいらないから。」といった表情でさっさと立ち去ってしまうのです。

そのかわいそーなテンペちゃんの料理、まず短冊型か将棋の駒くらいの大きさに切られ、たっぷりの油でカラリと揚げられます。そのあと、とうがらし、にんにく、赤タマネギを石のすり鉢ですりつぶしたものとたっぷりのトマトを少量の油でよ〜く炒め、どろりとしてきたら塩を加え、そこに先のテンペをドドッと入れ、全体に味がからまるまで炒め煮します。ケチャップ・マニス（甘い醤油）も入れます。トマトのかわりにクニツ（ターメリック）をすり潰して入れれば、スパイシーなカレー味になります。この甘辛いテンペのおかずはホントにごはんにぴったり。そりゃあ20年も30年も食べ続ければ飽きてしまうかもしれませんが、エナちゃんはいつか、このテンペとごはんだけで連続何回食べたら飽きるか、一度挑戦してみたいと思っています。

◆そして最後に第五の姿、Sele kejele（スレー・ク

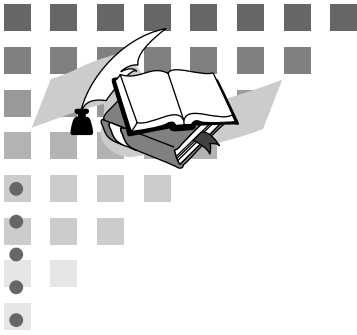
ジュレイ）、これはおそらく、めったにツーリストのみなさんの口には入らない、バリのダイズ加工品の隠れたヒットモノです。

まずダイズをよくふやかし、やわらかく煮てからまだあたたかいうちにラギーという発酵剤をふりかけます。このラギーというシロモノはBrem、そう、あのおいしいバリのライスワインをつくる時にも活躍します。

そして待つこと3日。やはりあのネバネバはありませんが、味も香りもまさしく日本の納豆そっくり。普通はこの状態で市場で売られています。これも必ず調理して食べるようです。まず中華ナベに油をしき、とうがらし、にんにく、赤タマネギ、クニツをすり潰したものを炒め、トゥラシ（エビの塩辛のようなペースト状のもの。ダシの役目をする）と塩を加え、香りが出てきたらスレー・クジュレイを入れ、全体に火が通り、味がしみたらできあがり。これもエナちゃんは一度食べてやみつきになり、おらずにこれがあると狂喜乱舞してしまうのですが、例によってバリ人にとってはもう「食べ飽きた安価なおかず」でしかなく、そのおいしさ、安さ、栄養の豊富さにもかかわらず、依然として人気低迷。

ああダイズ君！ なぜなぜ君はどこへ行っても不当な評価しか与えられないのでしょうか。ここに哀れな優等生、ダイズ君の悲しい宿命があるのでした。でもエナちゃんは君が大スキだからねえ〜♡

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK



● BUKU-BUKU 紹介 ●

タン・ナピ・ナピ

パリをこよなく愛した女流小説家が、『パリには、股間を理由も解からぬまま、孕ませる空気がある』と実に的確な表現をしています。まさに、エロスの風が吹く島といったところでしょうか。風土病のように、パリで恋をしていくあまたの娘達があります。

UBUD もごたぶんにもれず、この風土病に犯された娘達がたくさんいるようです。そんな UBUD を舞台にした小説を紹介したいと思います。

著者の平島幹さんは、1988年から1990年の2年と数ヶ月を UBUD に滞在し、滞在中の数々の体験を基にして、興味ある12のショート・ストーリーにまとめました。

題名は「タン・ナピ・ナピ パリ 終わらない夏の島」(発行所：ゲイン)です。

タン・ナピ・ナピとは、インドネシア語のティダ・アパ・アパ「何も問題ありません、ダイジョーブ。」と同じ意味のバリ語です。シン・ケン・ケンが日常使われる言葉とすれば、タン・ナピ・ナピは丁寧語のようです。

この12の物語には、ユニークなキャラクターのバリニーズがたくさん登場します。そして、UBUD のバリニーズがどのようにツーリストと関わっているかがよく理解できます。キャラクターについては、日本的なものさしで良い悪いと判断するのではなく、文化・習慣が違えば、道徳感や考え方が違うということを、充分理解したいものです。そうした上でバリニーズのキャラクターを知るには良いガイドブックにもなりそうです。

被害者意識からすると、文明人の傲慢さを批判し、嘲笑うかのような内容です。我々はなんと慌ただしく神経質に生きているのだろうかということを感じさせられます。それに比べバ

リニーズがいかに哲学的に生きているかが感じられます。またツーリストには、どのような心構えで旅行すれば良いのかという手引書にもなりそうです。この本をもしバリニーズに対する批判と受け取る人がいるとすれば、それは我々ツーリストがバリニーズに悪い影響を与えてしまった結果であり、責任はすべてツーリストである我々にありと思います。そういう意味では、我々に対する警鐘の本なのかもしれません。バリニーズはやはりバリニーズ。彼らにも長い長い歴史があるのです。賢く、そして、したたかに、またフレキシブルに生きています。心配は無用ようです。ティダ・アパ・アパの境地です。そんな境地の興味ある一冊です。UBUD って、本当に面白いですね。

その他にお薦めの本を二冊…。

■「姫子・イン・パリ」 著者：有為エンジェル / 発行所：中央公論社

△ 恋あり、笑いあり、バリ人の宇宙観あり、そしてブラック・マジックも登場する興味あるストーリーです。

■「ジャングル・ラブ」 著者：平島 幹 / 発行所：ゲイン

△ 平島幹さんの二冊目です。パリで暮らしてみたいと、6年間働いたオフィスを突然辞めて旅立った、一人の女性が遭遇する、パリの不可思議な恋物語。

UBUD には、日常に物語の世界があります。そして、毎日が舞台の上にいるようです。

あなたも UBUD 物語のキャストになりませんか?!

Ke Mana?

あなたはこんな経験をしたことはありませんか。UBUDの人々の、天性の人なつっこさからなのか、面識の浅い旅行者に、こんな風に声をかけることがよくあります。

ホテル、ロスマンなどの宿から出掛ける時には、「Ke Mana? (どこへ行くのですか?)」と聞かれたり、帰る時には、「Dari Mana? (どこへ行ってたのですか?)」と聞かれたりします。(初対面の時の Dari Mana? はどこの国から来たのですか? という意味になります。) 宿の従業員からは仕方がないとしても、店の前でたむろしている人や道端でたむろしている人々、数人から声をかけられます。それも何度となく。初めのうちは早く現地に慣れるという目的もあって、これも現地の人々とのコミュニケーションとしてはなかなか楽しいものの一つだと考え、あまり気にしませんが。しかしこれが毎日毎日続くと次第にうとうしいものになってくるようです。「どこへ行こうが、どこへ行って来ようと私の勝手でしょ、勝手にさせてちょうだい!」と思わず大きな声を出してしまう旅行者も多い様です。そこで少し考えてみてください。インドネシア語には朝、昼、夕、晩の挨拶やおやすみなさいなどの挨拶の言葉がありますが、バリ語にはそれにあたる言葉がありません。通常バリ人の挨拶は、「やあ、こんにちは」などという感じで「Kija?» (日常語)、「Lunga Kija?» (丁寧語) —どこへいくの〜?—や、「Uli Dija?» (日常語)、「Saking Napi?» (丁寧語) —どこいってきたの〜?—を挨拶として使っているようです。それをバリ人はツーリストにインドネシア語で、Ke Mana?・Dari Mana? と言って声をかけているといったところでしょうか。深く詮索して聞いているわけではないようです。そこで返事としては、「あっち」で充分なのですが、それではあまりにもそっけないと思う人は、「Jalan Jalan (散歩だよ)」と一言にこやかに言ってみてください。きっと彼らはそれ

で納得することでしょう。他に「Sudah Makan?» (ごはん食べたあ?)、「Sudah Mandi?» (マンディ-水浴びしたあ?) も挨拶がわりとして使われているようです。これも生活からきた挨拶のようで、あまり深い意味はないと思いますので、返事は Sudah (済みました) か、Belum (まだです) と答えれば充分のようです。また、食事の時、日本のように「いただきます」「ごちそうさまでした」の感謝の意味を含めた言葉はないようです。また、他の宗教のように神に感謝するという意味の言葉や職種もありません。食事は欲望の一つという考え方を持っていて、儀式の時以外は、日常の食事を他人と共にするというのではなく、ほとんど一人ですることが多いようです。そのため一家団欒で食卓を囲むということはありません。そのためにダイニングルームにあたるものがないため、適当な所で食事を済ませてしまいます。

こんなエピソードがあります。ワヤン君がテラスの片隅で皿を持ち右手でごはんをもぐもぐと食べています。その時あなたが前を通りかかったとしたら、きっとワヤン君はあなたに「Makan?» (食べる?) と尋ねるでしょう。でもその時、あなたは立ち止ってものほしそうに「Belum!» (まだです) と答えてはいけません。そんな答えが返ってきたら、ワヤン君は困ってしまってワンワ



ンワンと吠えることでしょう。いやいや、おどおどしてしまうことでしょう。ワヤン君にとって「Makan?」は、ほんの挨拶がわりのつもりだったからです。そういう時には、いくら食事が Belum でも「Sudah Sudah」(すみません)と、にっこりしながらその場をすみやかに立ち去るのがよいでしょう。

この食事に関する挨拶がまたくせもので、もう一つのエピソードをお話しましょう。例えばあなたが、ワヤン君をレストランに誘ったとします。そのレストランがツーリスト向けのレストランで、ワヤン君も慣れていないとしましょう。きっとワヤン君は、「Saya Sudah Makan」(私はもうごはんを食べました)と言って、おことわりするでしょう。でも、その「Sudah Makan」を全面的に信用してはいけません。それはたぶん、自分では払えない高い値段のメニューを前にして遠慮しているのです。そういう時には、「まあまあ、そんなこと言わずに、Coba Coba Makan (試しに食べてみてください)」と、あなたの方でメニューを選んであげてください、そしてワヤン君も一緒に食事を楽しむようにしてください。時々、バリ人の「Saya Sudah Makan」の言葉をうのみにして、自分達だけが美味しくうごはんを食べていて、つきあったバリ人が一人ポツンとコーヒーを飲んでいる…という光景を見かけたりします。そ



photo: E. Sugawara

うです私達ツーリストが、バリ人をレストランに誘った時は、快くご馳走してあげましょう。

話が横道にそれましたが、他にバリ語の挨拶としては、インドネシア語の「Apa Kabar (お元気ですか) ?」にあたる「Kenken Kabare?」(日常語)「Napi Orti?」(丁寧語)があります。「元気で (Baik: Bagus)」と答える時は、「Luung」(日常語)、「Becik」(丁寧語)です。

そして、よくバリの人々が公の席で使われる挨拶に次の二つがあります。「Om Swastiastu」「Om Santi Santi Om」。どちらも「皆さんが平和で幸福でありますように」といった意味です。前者は出会いの時に、後者はお別れの時に使われます。この二つの挨拶は、手を胸のあたりで合わせて言うようです。

さあ、皆さんもひとつバリスタイルの挨拶を使ってみてはいかがでしょうか。

「Om Santi Santi Santi Om」



DARI JEPANG

私はウブドが好きである。が、しかし…

南部ヒロシユ

断るまでもなく、私はウブドが大好きだ。素晴らしい音楽があるし、ウブドの友達とギターを弾きながら酒を飲むのは最高だ。しかし違った意味でクタも好きだ。マリンスポーツにこそ興味は無いものの、歌舞伎町の裏手に長年住んでいた私にとっては、南国好きのろくでなしどもが集まるあの猥雑な無国籍感覚がたまらないのである。

クタは旅行者の品格が試される街だ。あがらい難しい誘惑が黙っていても向こうからやって来る。売春、麻薬、いかさま賭博。新宿や六本木にだって無い訳じゃないが、熱帯性気候と何よりもビーチの存在が旅の解放感に拍車をかけ、本国では絶対にしないような事まで平気でやらせちゃう。売春をしないと生活ができない人間を生み出す社会機構にこそ問題がある、と良識ぶっていた奴が、ディスコでナンパに失敗して、翌日からホテルで売春婦とケミカル・ドラッグに耽ってたりするし、さっきまで混迷の世界経済を憂いていた奴が、マリファナが手に入らないか、路上で売っているのは偽物ばかりだ、なんて言ってくる。自分こそが偽物だって事に気が付かないんだろうか。

混沌の中から自分のスペースを見つけて、飲み込まれないように街と関わっていくのがクタの正しい楽しみ方だろう。少しでも気を抜こうものなら何が起るか分からないが、自分自身の欲望と対峙する事ができればあんなに面白い所はない。いや、別に、不埒な事をしちゃいかん、などと偉そうな事を言うつもりはないのだ。享樂するつもりならきっちり済ませてこい。しかし、ストリートボーイの口車に乗せられて覗きに行った『ミルダケタダ』の売春宿で怖い兄ちゃんに凄まれて理由も無いのに謝ったり、通りを隔てた向こう側で警官が見ているのに、ヤクの売人に金を渡そうとしてダッシュで逃げられるようなまぬけがウブドに流れて来て、ここはのんびりしていいや、俺の心の故郷さ、なんて勝手な事ほ

ざくのは、ウブドの人達にあまりにも失礼じゃないか？のんびりしたいだけだったら、日本にだっていくらでもいい所があるだろうが。日本も含む他の土地で通用しないような奴はウブドに来てでかいツラすんな。自分の国で女に相手にされない奴がバリエに来て金で女を抱こうなんて最低だぞ。ガラムの匂いをマリファナと勘違いして目の色変えるような大馬鹿者は中学からやりなおしてこい！ ああ、血圧が上がる。

私？勿論、二週間後にひかえた三度目のバリも最初はクタで充分に毒気を仕込んでからウブドに行くつもりだ。さあ、ジャラン・ハヌマンの悪ガキども、ギターと酒を用意して待ってろよ。又、路上をブイブイ言わせてやるぜ。(私の様な奴がいるから、ウブドも騒がしくなった、なんて言われるんだろうな。少しだけ反省。)





精密機器とバリの虫

えりりん

こないだUBUDに行った時、通信環境のテストをしようと思って、ラップトップ型のパソコンを持っていった。結局のトコロ、通信は回線のノイズがギチャギチャに多いので失敗だったんだけど、せっかくだからついでで、日記とかお小遣い帳とかつけることにした。でね、でね、マインデイを済ませて、宿のテラスなどでんびり寛ぎながら、バタバタとキーボード打ってたりしてね、テパナスなど飲みながらね、いいい気分なわけよね。こーゆー夕暮れ時は、景色の表情も豊かだからついついポーっと時の移ろいなど眺めていたりして、あれよあれよという間に辺りは暗くなってしまうわけね。で、はつと気付くと膝の上のパソコンの液晶画面に虫がワンワンと群がっているですよ。いやあ、明るいもんね、ここ。なんて妙に納得しながら、コラコラと手で払いのける。…と、一匹だけどうしてもとれない。よおしく見るとシルエットになっている。れーせーに状況分析する。ええーつ、こいつ、液晶の裏側に入ってしまった。いやあ、どこの隙間から入ったやら、液晶

画面の裏側をウゴウゴと移動しているであります。まいったね、こりゃ。これがほんとのバグよ、なんて冗談言ってる場合ぢやないけど、ゆずっても出てこなかったから、きつとこの時の虫は、中の基盤の片隅で干涸びているんぢやないかと思いまふ。カサ、コソソ。合掌。

それからこれはずっと前の話だけど、こんなこともあった。一眼レフのカメラを宿の机の上に、一晚フィルムが空の状態で置いといた。翌日の昼過ぎ、フィルムを装填しようとして裏蓋を開けると、中からびっくりする位たくさんの白い卵を抱えた蟻がゾワゾワと出てきた。「おお、こんな所にちようどいい穴蔵があるぞ、さささ、どんどん産んで産んで」って蟻さんは思ったのかしら？ たった一晚置いておいただけなのに、なんとという生命力&繁殖力！

ほんとにバリの虫達の行動には、いつも驚かされる。精密機器もカタナシだけど、不思議とこんな苛酷な扱いをうけてもバリに持った機械は壊れない。意外とそんなもんかもしれないね。

■次号 vol.3 の予告■

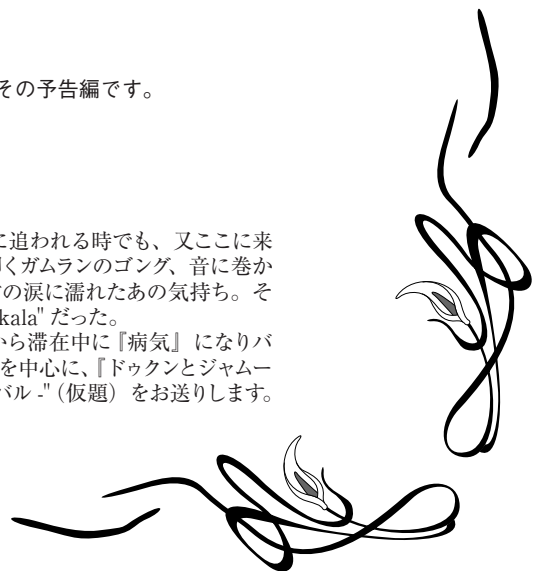
下記の通り、山辺 杏さんが、Vol.3 より連載してくれます。その予告編です。

"HIDUP BARU" - ヒドゥップ パル - (仮題) / 山辺 杏
『うたぐり屋は、目に見えるものしか信じません。』
"サンタクロースっているんでしょうか？" -1 より

バリに好かれてしまったと、思いたい。鳥に来る度、帰り支度に追われる時でも、又ここに来る訳を見つけてしまっている。 チュンパカの花の香り。自分の叩くガムランのゴング、音に巻かれて"三時"の方角に行ってしまった私の心。スカワティ村のK君の涙に濡れたあの気持ち。そして、知らぬ間に惹かれて行ったものは、一見えないもの—"Nisukala" だった。

何回来ても病氣らしい病気をしなかった私自身が、意外な事から滞在中に『病氣』になりバリのドクン-2 にたどり着いた。ドクンA氏の治療を受けた話を中心に、『ドクンとジャム-3』のお話を、勝手気ままに綴る、"Hidup Baru - ヒドゥップ パル-" (仮題) をお送りします。初回のお話は、"Oh! Tuhan" の巻。斯うご期待。

- *1 "サンタクロースっているんでしょうか？"
中村妙子 訳・東逸子 画 1977年12月初版 偕成社
- *2 ドクン：バリアン。伝統的な治療師・祈祷師。
- *3 ジャム：草根や木皮等を原料に作られた民間伝統薬。



ragu-ragu lagu-lagu ?

I Made Takeya

バリ・フリークはガムラン音楽が好きだ。私の友達の日本人の何人かは、人目（人耳？）もはばからずにレゴンなどのカセットをガンガンかける。それも朝からである。そういう人達は、私にとって少しばかり遠い存在である。

私はバリのガムランが好きだ。しかしガムラン好きの日本人はきらいだ。いや、きらいなのではなく、その人とのあいだに距離を感じてしまうのだ。たぶんそれは、私がなにはともあれ、ポップ・インドネシアが好きだということからくるのであろうし、2番目にはダンドゥッドが好きで、ガムランといえばバリよりもジャワのほうが好きだ、ということからくるのであろう。でもそれだけではない。たぶんもうひとつの理由は、バリ人がバリのガムランを好きだという場合の、ある種の奥ゆかしさと、日本人の若い人達のガムラン好きとのあいだに、何か異質のものを感じてしまうからであらう。

考えてみれば、バリ文化の中のガムランとは、日本文化の中の邦楽に近いのではないだろうか。神社でおこなわれる何かの祭儀のうちに、あのプーンという笛の音と、ドン、ドンという太鼓の音が、素晴らしいという日本人はどれだけいるのだろう。むしろそれはそれなりにいいし、深みがある。しかしそれは別にとり立てて素晴らしいというべき対象ではない、という気がする。それは、たとえ表舞台に立つわけではないとしても、日本の文化の中にたしかに息づいているのであり、それをふりかざしたりしないからこそ、そのよさが保存されているのだ。

それにたいして、われわれはバリのガムランを、なんだかどてつもないもののように扱う傾向がないだろうか。自分だけが、あるいは自分たちだけが知ってる至高のもの。しかし別にガムランは、ヨーロッパ人や日本人が近代音楽や近代芸術の視野からそのすぐれた点を見出したとしても、本来そうした西洋

的な視野の中に取り込まれて、その中でのみ生息するようなものではないのだ。バリ人のガムランにたいする態度に、そういうネガティブな抵抗が潜んでいるように思うのは、私だけであらうか。そしてそういうネガティブなしかしガムランにたいする愛情が、ひとつねじれたかたちで、あるいは屈曲したかたちでさらに内に閉じ込められているのが、今のバリの若者のポップ好き、西洋音楽好きという一般的な傾向ではないだろうか。私はそういうバリ人たちの、ひそやかでありつつ率直な、屈折しているようにいて実は正鵠を射ている、音楽というものにたいする一種理想的な態度にたいして、あこがれとすこしの嫉妬を感じるのである。

そういう私がポップ・インドネシアを好きなのは、ひょっとするとバリ人の音楽というものにたいするセンスを十分理解できていないことを、あるいはたぶん理解できないであらうことを、自覚しているからかもしれない。しかし最後にいいたい。私の日本人の友達よ、朝からガンガンレゴンのカセットをかける君達は、朝から神楽のカセットをガンガンかける外国人として、バリ人に見られていることを自覚しなさい！それにたいして、ポップのカセットをかけていれば若者たちに、ダンドゥッドのカセットをかけていれば中年の人達に、かならず受け入れられるのだ。そしてとにかく、もっとポップ・インドネシアを愛好する輪を広げようではないか！



Gallery

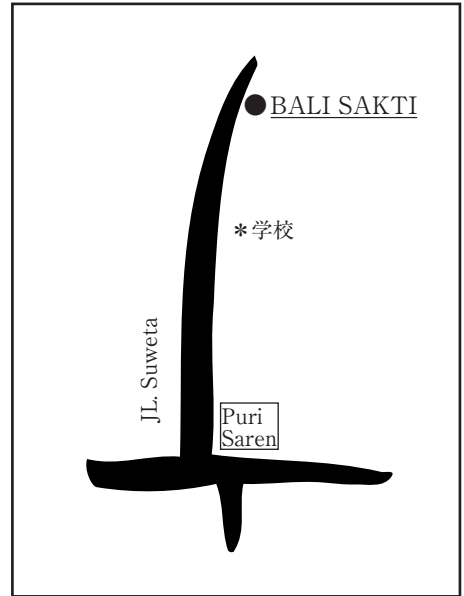
ギャラリー探索

BALI SAKTI

UBUDの王宮、プリサレンから北へのびるJl.Suwetaを3Kmほど上がっていくと、突然視野が開け、美しいライスフィールドが見渡せる所に出る。このSaktiという村に、最近いくつかのバンガローが建てられ、静かな人気を集めている。

そんなロケーションにあるギャラリー「Bali Sakti」(バリ・サクティ)。UBUDのにぎやかな画廊では、やたらに人が寄ってきては話しかけられ、風の通らない部屋の中で汗だくになり、ゆっくりと絵の観賞もできないといった状況が多いがここは違う。ひんやりとしたタイルが気持ち良く、あたりはシーンと静かで何時間でも絵を見つめていられる。ついつい床に座り込んでくつろいでしまう。…と、バリ・コピなど出してくれたりする。

この「Bali Sakuti」のオーナー、ワヤン・カルタ氏は日本語を話す。UBUDの中でも安心して頼めるガイドの一人として人気も高い。



彼のコレクションは、さすが地元バリ人の集める絵だけあって「あ、こんな絵がほしかったんだ!」と思ってしまう作品ばかり。特に彼の弟、マデ氏の描くバリ・ダンサーのシリーズは、バリファンなら必ず欲しくなる。その他、ちょっとしたインテリアにもぴったりのモダンタイプの小作品の品揃えもいい。

ここでゆっくり品定めをして、お気に入りの一点を選んでみよう。



Toko ◇ BEST 店

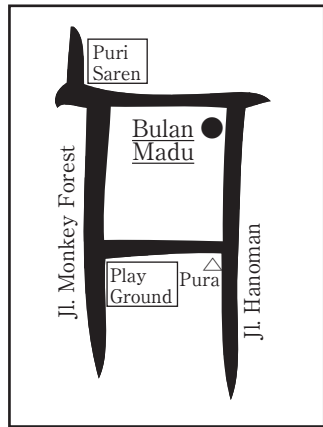
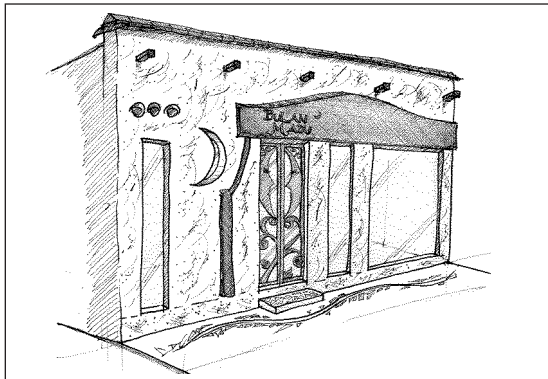
Bulan Madu

さてここで、現地編集「極楽通信 UBUD」ならではの、超ホットなトピックスをひとつ…!

クリーム色の壁に刻まれた三日月型の窓がトレードマークのブティック "Bulan Madu" (ハネムーンの意味) が、ニュピ明けの4月16日にオープンする。場所は、ジャラン・ハノマンとジャラン・ラヤ・ウブドの交差点のすぐ近く。これまでアート好きの人間が集まる場所にもかかわらず、UBUDにはいまひとつおしゃれなブティックがなく、不満を感じた人も多いに違いない。

この "Bulan Madu" は、Bali の UBUD という土地柄の魅力を反映し、クタなどのビーチ・リゾートとはひと味違ったリゾート・ファッションを展開するらしい。"シックなエスニック" をコンセプトに、素材にこだわり、日本に帰っても着られるようなモダンで質の高い商品を取り揃えるつもりだとオーナーは語る。サイズも日本人向けに小さめになっているそう。しゃれたインテリアでこじんまりとまとめられた店内には、レディース、メンズの洋服の他に、アクセサリ、小物も並び、UBUD での買物がますます充実する。

この "Bulan Madu" は、Bali の UBUD という土地柄の魅力を反映し、クタなどのビーチ・リゾートとはひと味違ったリゾート・ファッションを展開するらしい。"シックなエスニック" をコンセプトに、素材にこだわり、日本に帰っても着られるようなモダンで質の高い商品を取り揃えるつもりだとオーナーは語る。サイズも日本人向けに小さめになっているそう。しゃれたインテリアでこじんまりとまとめられた店内には、レディース、メンズの洋服の他に、アクセサリ、小物も並び、UBUD での買物がますます充実する。

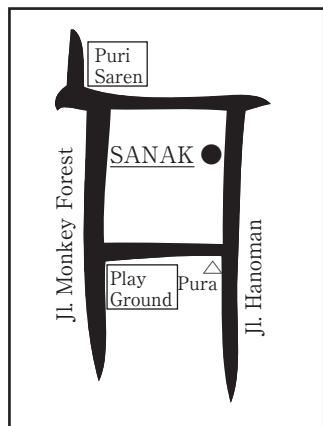


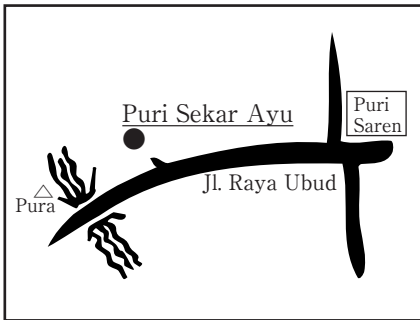
Warung ◇ 味な店

Masakan Padang, Dun Sanak

泣く子もだまる、マサカン・パダン。訳すとパダン料理。スマトラ島のパダンが発祥の地で、このパダン料理を食べさせる店は、インドネシアどこの街へ行ってもある。店先のガラスケースに山と積まれたナゾの料理の皿、皿、皿…。何人かで食べに行くとその途方も無い数の料理を、少しづつ小皿に分けて、テーブルの上のところ狭しと並べてくれる。「これ全部食べきれないよお～」という心配は御無用。手を付けた皿の分のみ、後で精算する仕組みになっているのだ。一人で行く時は、皿の山の前で「コレとコレとコレ入れて」と自分でチョイスしなければならない。

さて、肝腎の料理だが、そのほとんどはカレー味。と言っても日本のカレーを想像してはいけけない。もっとスパイシーにもっとド辛くなっている。たいていコナツミルクを加えて煮込んであるのでコクがある。素材は鳥、魚、ナマズ、ゆで卵、牛、野菜、エビ、イカと豊富で、さらに味付けを変えて何種もの品になる。それらのおかずにごはんが大盛り、さらにはカレースープをかけてくれるので、毎日おかずを変えれば飽きない、と言いたいところだが、油を使った料理が多いので、たまに食べるにはいいだろう。もっとも知人(日本人)で、昼、夜、一週間毎日食べていた人もいたが…。何より便利なのは、なぜか24時間営業なので、真夜中に飢えた人々にとっては救いの神なのだ。それも UBUD にはこー軒しかない。オダランで夜遅くなって晩ごはんを食べそこねた人もぜひご利用ください。





プリ・スカル・アユ・バンガローズ

石本 君代

全5部屋ほどの小さなコテージですが、人をなごませる不思議な魅力を備えています。一泊すると必ず二泊したくなり、二泊するとさらに三泊したくなり、そして四泊、五泊……ついには三ヶ月の長逗留をした日本人もいるほど。このコテージの魅力の大半は、経営者・アグンの人柄によるもので

しょう。温かくて知的でユーモアのセンスがあって、気配りが抜群。彼の人柄に惚れ込んでここのリピーターになった人は世界中に大勢います。

ウブド中心から行くと、チャンプーハンの吊橋100m手前右の高台にあり、騒がしい都会を離れ、バリの田園風景を眺めながら静かに休暇を楽しみたい人にはぜひお勧めです。また、ここの庭には「鹿脅し」までしつらえたアグン手造りのミニ日本庭園があり、夕暮れ時には飛び交う蛍と、「鹿脅し」の音色とが相俟って幻想的。ちなみにアグンの奥さんは日本人で、私の友人です。やはり、彼の人柄に惚れ込んで……というやつです。

Pesan & Kesan

旅人一声

篠田暁子

今回でバリは2回目。バリでの生活があまりに心地良かったのでまたすぐにやってきました。バリは芸術の盛んな所。踊りを観賞したり、長い長い田舎道を散歩しながら、あちこちで絵を描いたり木彫りをしている人々の姿を眺めるのが最高の楽しみ。しかし、一番はやはり何と言ってもこれらの芸術を支える自然の美しさ。

バリは海やライステラスが有名ですが、私が前回バリに滞在した際に一番感動したのはキンタマーニの星空。パトゥール湖畔から見上げてた夜空には無数の星が鮮明に光り、その中央を天の川が走っているのははっきり見えます。寒い中でポーッと座り込んで眺めているとあちこちから流

れ星。圧巻でした。また、キンタマーニではトルニャンに行く際に湖からでなく隣の山を登って行ったのですが、その時山頂で見た日の出も素晴らしかったです。早朝まだ空気のみんやりする中、山頂を尾根づたいに歩きながら向こうの海から暁の光り。最高の気分。

今回は雨期。あいにく夜も雲がかかっている事が多く、前回のような星空は見えません。でも夜テラスでお茶を飲んでいると夜空のあちこちから音もなく雷が光る、なんていうのは雨期ならではの風情かもしれません。

こんな生活してると思わず性格がよくなってしまいうさだ。

その他のニュース

■2月2日、地球の歩き方・バリ島編に、写真入りで登場している、Gusti A. ウィスワ氏が結婚いたしましたことを、紙面をお借りして報告させていただきます。ウィスワって誰だったっけ、と考え込んでしまう方には、ランドウンと言ったほうがわかると思います。背高ノッポ（ランドウン）と愛称されるように、バリ人にはめずらしい1.8mの長身、この長身と、流暢な英語と、自らも「私の名前はガンタンです」と言うほどのハンサム・ボーイ。あまたのツーリストに、あまたの甘い夢を与えたようです。そんなプレイボーイもA.A.Manikちゃん(20)という、可愛いバリニーズに心が奪われ、身は虜になってしまったようです。バリに年貢があったのか、はたまた、悪代官が備前屋と悪事を企んでいたのかは、知る由もありませんが、ライバルのプレイボーイ諸君は「奴も、年貢の収め時か」と、ほくそ笑んでいたそうです。

一昨年Openした、Sai²Barは、只今休業中ですが、家庭が落ち着き次第、再開したい、と本人は言っています。しかし、愛妻には、すでにAnakが仕込まれているようで、子育てが忙しくなり、再開はいつのことやらと、Sai²Barファンは首を長くしている今日この頃です。



■バリの魅力溢れる男性との結婚を夢見ている、M子(24)さんは、かなり気の早い話ですが、将来に備えて、産婦人科病院を見学することにしました。そこで巷の噂に聞く、デンパサールのルマ・サキット「カシ・イブ」に出掛けて、その印象を話してくれました。

「病院は2階建ての白い館で、まるで清里にあるペンションのような外観です。ロビーも広く、受付嬢も親切で、丁寧に入院の諸手続きの方法を教えてくださいました。病院内を見学しましたが、医療設備も近代化されていて、まずは安心という感じです。病室も清潔でした。病室というよりは、女性好みのマンションの一部屋といったインテリアでした。ピンクのカーテンには、思わず「わあ～、可愛い、泊まってみたい!」と叫んでしまいました。そしてなんと、テレビやホット・シャワー、トイレも、お部屋についているのですよ。値段は日本の病院とほとんど変わりません。バリの物価からすれば、かなり高級な病院というわけです。しかし、これなら、日本にいる両親も安心してくれるでしょう。日本女性の皆さん、心強い味方が見つかったという思いです。貴方も心おきなく恋愛して、子作りに励んでください。そして、世界平和をめざしましょう!」なんて、NO天気な発言をしていました。是非、貴方も一度、将来に備えて見学してみたいかがですか。

■皆様ご存じ、自称プータローこと、プトラ(31)がバンガローをOpenしました。威厳をもって紹介しますと、世界的に有名なプリアタン村、ティルタ・サリのガムラン奏者。そして、ブラフマ階級ということもあってか、どことなく気品の漂う顔だちは、グループのなかでも、ひときわ目立ついい男。その名もイダバグース・プトラです。

バンガローはアビアン・サリと称し、なだらかなライステラスを見下ろし、心地よい風が吹き抜けるすばらしいバンガローです。今のところバンガローはひとつですが、日本人男性とのジョイントで、今後バンガローは増えるそうです。将来は、ガムラン、

バリ・ダンスのスタジオも作りたいと夢を語ってくれました。

プトラは日々、庭の手入れで、おじさん業を営んでおります。あなたも近くへお寄りの節は、一度立ち寄ってみてください。アビアン・サリの庭で作ったミントで、プトラがおいしいミント・ティーをあなたにもてなしてくれるでしょう。



■ UBUD 病重症患者のいかりや長髪氏（年令不祥）は、「近頃のツーリストはなっとらん。義理も人情もない、UBUD 道に外れた奴が多くていかん」と、やりばのない怒りで肩を怒らせていました。次のような噂話を聞いて憤慨しているようです。

あるバンガローのオーナーが、前から宿泊している日本人女性に「申し訳ないが、すべての部屋を借りてくれる欧米人がいるので、部屋を明け渡してくれませんか」と、言ったそうです。これに対して、日本人女性は怒り「どうして私が出なくちゃいけないの。そちらの勝手に追い出されるのはいやだわ、居続けてやる」と、啖呵を切ったそうです。

確かに日本的な基準では、住んでいる人に権利があるように思います。しかし、ここはインドネシアです。高級ホテルならいざしらず、バンガローやロスメンでは、オーナーの考えが通用する常識であり、法だと考えたのが正しいと思います。オーナーが出てくださないと頼めば、出るのが常識。それを居座るとは、単にプライドが傷つくのがいやなだけの傲慢さを丸出しにした「ごね」なのです。ごねても何も良いことはありません。どうせ出なくちゃならないのなら、素直に出る方が得策かと思います。なるほど、いかりや長髪氏が青筋立てて怒るのも無理はありません。「ほかのツーリストが迷惑するのがわからんのか？」と、今にも血管が切れそうな形相で怒っています。皆さん、くれぐれも国が違えば常識が違うということを、もっともっと認識しましょう。

その2
ほりり

二日の夜は静かだほど
まっ暗だねえ
9
9
こんなにもまっ暗だと
いっちゃおうねえ
9

ちんぽで雷がうつけまて、
ニゲババババババ
6
ほだねー
ええけどね
6

おっどにだんえいさほっ
いんがまにんがまら
思えんがね

あたし誰や
あ、バンババ。まっ暗だ
せんせん見えんね
わっ！誰か、
こいんた、
停電じゃあ
あ、あ、あ、あ、あ
あ、あ、あ、あ、あ

【年間購読申込み方法】
エアメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会：伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、¥3,000.-。おりかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。

Name	Point	Address / Tel	
Semara Ratih	あのスマラ・ラティのリーダー、アノムそしてアユがコーチしてくれる。宿泊施設有。	Jl. Kajeng 25, Ubud Tel. 96277	ダンス、ミュージック
Puri Agung	プリアタンの王宮でも習えるのだ！ 宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Mandara	御存知、ティルタ・サリのご本家。宿泊設備有。	Peliatan	ダンス、ミュージック
Gunung Merta	日本語のできるババ・イダ・バグース氏が相談にものってくれる。宿泊設備有。	Andon Tel. 975463	ダンス、ミュージック
Nata Raja	STSI (芸術大学) 出身のワヤン氏は、マルチ・ティーチャー。	Jl. Sugriwa, No.20, Ubud	ダンス、ミュージック
Wayan Karta	カルタ氏本人はガイドだが、家族はダンサー・ミュージシャンが粒ぞろい!	Jl. Suweta, No.16, Ubud Tel.975730	ダンス、ミュージック
Sanggar Centil Cili	STSI 出身のメンバーを中心に、スタッフもやる気満々。気軽に習えます。	Pengosekan, Ubud	ダンス、ワヤン・クリッ
Dewa Berata	あのスマラ・ラティのクンダン (名物男!) 奏者。STSI 出身。お父さんから、4人の兄弟みんな音楽一家。	Pengosekan, Ubud	ミュージック
Gusti Sana	SANA 氏独特の、カエル百態、ちょっとエッチなタッチ。とてもやさしい先生。	Pengosekan, Ubud	ペインティング
Budiana	D. ボウイーも持っている、プディアナ先生の摩訶不思議な、エロティックなスゴイ絵、あなたも描けます。	Jl. Hanoman	ペインティング

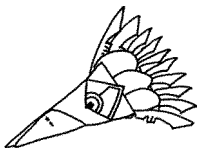
Zwinnish

Pengumuman

★京都に住んでいて、バリダンスを習っている人、興味のある人、同好会を作りませんか? 連絡待ってます。
連絡先 豊田佳子
〒602 京都市上京区新町中長者町角
TEL.075-441-5022

★尋ね人

三年前、UBUD のセゴールで飲んだけれいたうすい君、風の便りでは沖縄にいると聞きます。消息を知らせてください。
連絡先 影武者まで



★ウブドの真髄を味わうツアー、遂に出現!!
これまでのありきたりのツアーでは物足りないリピーターに耳寄りな NEWS。
ウブドだけに滞在して、ウブドにどっぷりと浸ってウブドの良さを体験するとともに、フリージング(プレス)のワークショップをプラスして、神秘体験を味わおうというぜいたくなツアーです。
同行講師はフリージング(プレス)リード歴15年、ウブド中毒の井上克巳 (Aiko)。
ホテルはチャハヤ・デワタを予定。
費用:22万5千円(ワークショップ、ミステリーツアー代を含む)
日程:1994年6月1日~8日(泊8日)延長も可能。
詳しい事は下記にお気軽にお問い合わせ下さい。
〒214 川崎市多摩区枳形 4-3-1-403
プレス・エナジー研究所 ツアー係
TEL. 044-911-5504 / FAX. 044-911-7978



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / Yumi S. / Mansha / 堀 祐一

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：小原孝博 / 堀 祐一 / 菅原恵利子

イラスト：柚木美里

カバー題字：星屋知恵

ロゴデザイン：Hiroko S.

インドネシア語監修：Rianto S.

極楽通信「UBUD」Vol. 2

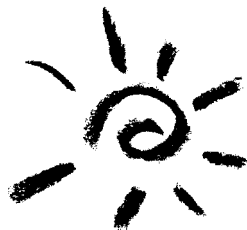
1994年4月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud, Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1994 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 106 東京都港区麻布台 3-4-4 Iikura Comfy Homes B-102
ポトマック株式会社内, tel.03(3583)0801 fax.03(3583)0803